ぼくのなつやすみ　～のんのんと一緒～

Edward

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゲーム「ぼくのなつやすみ」と「のんのんびより」をあわせればどうなるのかな？と思いつきましての二次小説になります。

難しい事を考えず、思いつくまま進行しますのでどうなることやら・・・。

時代背景はのんのんびより。そこに投入されたぼくのなつやすみの定番設定、おかあさんの臨月によりおばちゃんの元に預けられたボク君・・・。のんのんのびよりのほのぼのさと、ぼくのなつやすみのちょっぴり切なさと愛おしさを表現したいと思います。

ボク君の一夏の成長を見守ってくださいね♪

目次

8月1日 ―― 1
8月1日の夕方 ―― 5
8月2日の早朝 ―― 9
8月2日の午前中 ―― 14
8月2日の午後 ―― 19
8月2日の夜 ―― 23
8月3日の朝 ―― 27
8月3日の午前 ―― 32
8月3日の午後 ―― 36
8月3日の夜 ―― 40
8月4日の朝 ―― 44
8月4日　海水浴！そのいち♪ ―― 48
8月4日　海水浴！そのにっ♪ ―― 53
8月4日　海水浴！そのさんっ♪ ―― 58
8月4日　海水浴！そのよんっ♪ ―― 63
8月〇日　閲覧注意！絵日記の最終ページ ―― 68
8月5日の朝 ―― 72
8月5日の午前 ―― 77
8月5日の深夜 ―― 82
8月6日の朝 ―― 86
8月6日の午前 ―― 91
8月6日の午後 ―― 95
8月6日の夜 ―― 99
8月7日早朝 ―― 103

8月1日

のどかな田園地帯をたった二輌の旧式電車か走る・・・。
どこまで走ってもまるで同じ風景、しばらくみていなかったが帰省してもどことも変わってない風景に溜息をついた。
「ちっとは、変わってくれたら帰り甲斐があるんだけどなあ～。」伸びをしながら誰も乗っていないと思われる車両で独り言を吐いたのだが1人少年が乗っていた、突然の独り言で自然と目が合ってしまう。
１０歳くらいだろうか、手元には小さな旅行カバン。
かわいい狼が描かれた赤いシャツに半ズボン、おかっぱ頭に切られた髪にピンクのほっぺ・・・。かわいい男の子が座っていた。
「あれ君、新幹線で見かけたね？一緒に乗ってたお父さんは？」
「・・・おとうさん、急に仕事が入ったみたいで東京にかえっちゃった。降りる駅に迎えに来てくれてるから大丈夫みたい。」
「そっか・・・、えらいね。切符見せてみ？一応どこで降りるか見てあげるよ。」渡されたその子の切符を見ると私と同じ金額が見えた。
「私と同じとこだ、東京からなのに同じなんて偶然だね。
私、宮内ひかげっていうの？君は？」
「ぼくはボクだよ、みんなそういうの。」
「・・・へえー斬新だね、まあいいや。ところでボク君はどこの子？見かけない顔だけど。」
「ボク、お母さんが臨月でお家が大変だからこの夏休み叔母さんの家に預けられる事になったんだ。」
「そうなんだ、東京から来たなら驚くよー。すごい田舎だから。」
「田舎って？」
「なーんにも無いところだよ。コンビニもないし、ビルもないし、あるのは山と川だけ！」ひかげの説明とは反対に少年は目を輝かせる。
この純粋な目にひかげは眩しく感じる・・・。
「それってすごいところだよ。ボク遠足くらいでしか見た事ないよ。」
「・・・見方が変われば変わるもんだわー、私はもう見飽きたよ。」
ひかげの言葉が耳にはいっていない少年は、この夏休みを期待で一

杯にしていたのであった。

「ボク君ー、そろそろ降りるよー。準備しなー。」ひかげの抑揚のない声がかかった時、うたた寝をしていたみたいで一気に覚醒する。

はっと辺りを見渡すと、日は随分傾いていた。

また夕方とはいかないが、昼食べたご飯はすっかり消化されおやつを食べたくなる頃合いであった。

「ん？食べる？」ひかげはスティック状のキャンディを舐めており、もう一つを渡される。

「ひかげおねえちゃん、ありがとう。」少年は包装を向くと笑顔で口にする。

「おー、素直に喜ばられると破壊力あるわー。れんげもこれくらいなら可愛がりたくなるのになー。」

「れんげ？」

「あー、私の妹だよ。また向こうであったら紹介したげる、この間一年生になったばかりだよ。ボク君は何年生？」

「三年生。」

「そっかー、じゃあ一緒に遊んであげて。あの子年の近い子いないから喜ぶよ。」

「でも、二年も違うよ。」

「うちの学校、中学と小学一緒なんだけど全部で生徒が五人しかいないんだ。四月に転向して来た子がいるらしいけど、いなかったら四人だけなんだから。」

「少ないね、少子化って事？」

「あはははは！少子化どころか、もともと人が少ないからそれくらいになるんだって。・・・とにかく同級生が一人もいなくて次がその転校生の五年生らしいから、ボク君が一番年齢が近くなるんだ。」

「そうなんだ、わかったよ。ひかげおねえちゃん、その時は一緒に遊んで見る。」

「うん！頼んだぞ、ボク君。・・・あっ、着いたよ。」ひかげは慌てて荷物を拾い上げると、ドアの開閉ボタンを押して外に飛び出し、それ

に習って一緒に飛び出した・・・。

そうしてボクは東京では味わうことのできない、夏が始まった。
あの夏の出来事は全てが新鮮で、決して忘れることのできない大切な夏の思い出の始まり・・・。

ホームを降りたボクは、迎えに来ているだろう人を探して辺りを見回した、程なく三人の家族がボクを見るなり手を振って呼んでくれた。
「ボク君久しぶりね、大きくなって・・・。」おばちゃんがボクの目線にまで頭を下げてくれて頭を撫でてくれた。
「おばちゃんの事覚えてる?前にあったのがまだ幼稚園だったから、覚えてないかな?」ボクは記憶になくて、照れてしまい俯いた。
「おばちゃんは、お母さんのお姉ちゃんなの。三月までは東京に住んでいたんだけど、お父さんが転勤になってこっちに引っ越ししたんだ。そしたらボク君のお母さんが赤ちゃん産む準備があるから夏休みの間引き受ける事にしたのよー。突然でごめんなさいね。」
「そうなんだ。おばちゃん、これからよろしくお願いします。」ボクの挨拶におばちゃんは再び頭を撫でる。
「いいのよ、自分の家だと思って思いっきり遊んで過ごしてね。・・・そうそうおばちゃんの家族を紹介するわ。」そういうと後ろに控えていた二人が前へ出てくる。
「こっちがおばちゃんの旦那さん、ほとんど出張と仕事で会えないけどたまに休みで家にいる時は遊んであげてね。男の子とキャッチボールするのが夢だったみたいだから。」
「ボク君こんにちは、そういうわけで今度の休みの時は一緒に遊ぼうね。」
「うん、おじちゃんよろしくね。」
「こっちが、娘の蛍よ。ボク君が小さい時蛍が手を引いて遊んだんだけど、覚えてないかな?」

「ボク君、蛍です。」蛍ははにかみながら挨拶をするとボクは記憶の中から呼び起こされる。
「・・・蛍お姉ちゃん?覚えてるけど、そんなに大きかった?大人みたい。」
「はう!?」蛍の仕草におばちゃんは笑う。
「大きいでしょ、この子これでも五年生なのよ?この一年でぐーんと背が伸びて大人っぽくなっちゃったけど、頭の中は五年生だから気にしないでね。」
「うん、わかったよ。蛍お姉ちゃんよろしくね。」
「うん、ボク君よろしくね。」蛍と握手を交わして一家の挨拶が終了する。
「しょーねーん、じゃーねー。」ひかげは遠巻きにボクへ挨拶すると大人の女性と一緒にホームを後にする。親ではなさそうで、おねえちゃんのおねえちゃんかな?とボクは頭をひねった。
「あ、先生だ。あの人誰だろう?」蛍おねえちゃんはその女性を先生と呼んだが・・・、ますますわからない。
「さあ、私たちも帰りましょう。」おばちゃんの一言でホームを後にするのであった。

8月1日の夕方

駅から車で走る事２０分程、殆どが昔ながらの古民家ばかりの家が見える中で一条家はコンクリートの新築の一戸建てであった。
東京ではよく見た家であるが、田舎にあるとマッチしないと思うのはボクだけだろうか・・・。
すぐに家に通されたボクはすぐさま二階の一室に通された、蛍のおねえちゃんのとなりにある部屋で中は簡易なベットと机が置いてあるだけの六畳の洋間。
「ここがボク君のお部屋よ。東京からきた荷物は先に開けて適当に直してみたけど、違ってたら直してちょうだい。
もう少ししたら夕飯だけど、よかったらそれまでの間近くを散歩してみる？」
「うん、わかったよおばちゃん。ちょっと見てくるね。」
「あ！ちょっと待って、これ渡しておくわ。」おばちゃんはエプロンから小さな携帯電話を出すと、ボクの首にかけた。
「これは？」
「キッズ電話よ、これがあれば私の家に電話できるし戻ってきて欲しい時は連絡できるの。防水だから濡れても大丈夫！」おばちゃんは抜かりなしとばかりにボク君にポーズをとる。
「おばちゃん、でも電波ないみたいだよ。」ディスプレイを映しても電波のマークは圏外であった。
「はう!?ああー、ボク君の身長では電波が届かないかあー。」
おばちゃんの手に携帯が渡ると再び携帯は電波をキャッチする。
「ここでは電波は高いところしか飛んでないんだ。」
「田舎だからねー。じゃあ狼煙でもあげよっか？」
「ずこーー！」ボクは滑る仕草をしておばちゃんにリアクションで返した。
電波はあまり飛ばないが、ＧＰＳ機能は動くそうなのでいざという時は場所が特定できるのでそのまま持たされる事となり、いざとなれば迎えにきてくれるみたいだ。

とりあえず外に出ると声がかかる。
「ボク君、お出かけ？」蛍は玄関で同じように出かけるそぶりであった。よくみると足元に犬、そして持つリードで散歩に行くことがわかる。
「うん、ちょっと辺りを見て回ってみたくて。蛍お姉ちゃんは散歩？」
「この子うちの飼い犬でペチっていうんだけど、今日は散歩できてないから・・・。そうだ！私がこの辺りを案内してあげる。」
「ありがとう蛍お姉ちゃん！」
二人はペチのお散歩コースを兼ねて辺りを回ってみる、道のほとんどはアスファルト舗装はほとんどされていなく農道のような道が多い。
夕方の田舎道は車の往来もなく、虫の合唱と蝉時雨が響く。
蝉は都会でよく聞くアブラゼミとクマゼミではなく、ひぐらしとツクツクボウシの心地よい合唱がはじめての田舎を迎えてくれるように旅の疲れを癒してくれた。
「ボク君、今日は東京からの長旅で疲れたでしょう？明日からはもっと色々な所に連れて行ってあげるね。」
「ありがとう蛍おねえちゃん。ぼく、夏休みの宿題はだいたい終わらせてきたんだけど、自由研究とか絵日記とか残ってるから困ったら教えて欲しいな。」
「いいよ♪自由研究するならここは題材が一杯あるよ、どんなことしたい？」
「うーんとね、・・・まだ思いつかないや！」
「そうだよね、まだきたばっかりだからね・・・。私もまだ決めてないから一緒にやろう。」蛍は右手にリード、左手にボクの手を引いて帰路につきだした・・・。

「まよった!!どーしよー!!ごめんね、ボク君!!私が迷子になって、ああーどーしよー!!」蛍の取り乱しにボクは硬直する、さっきまでお姉ちゃん風を吹かせていた蛍は、一転して取り乱す。

思ったより遠くまで歩いてしまい、近道を提案した蛍お姉ちゃんは山道に入った。ボクは嫌な予感がしたが、しっかり者のお姉ちゃんなら大丈夫と思ったのが失敗だった。

そういえば遠い記憶に蛍のお姉ちゃんは方向音痴で、こんな事があったような気がする・・・。

あの時はボクの地元だったから先導したような気がするけど、今回は知らない土地・・・、正直お手上げだった。

「蛍お姉ちゃん、大丈夫だから泣かないで。多分おばちゃんとおじちゃんが探してくれてるよ。」

「だってー。お母さん達もこの辺りのことまだわかってないから探しきれないよー、うえーん!ごめんなさいー!!」蛍お姉ちゃんはとにかく取り乱していた。

「ペチー。君ならわかる?」ボクは犬のペチにおばちゃんの臭いがついた携帯電話を鼻先へ持っていく、ペチは悟ったのか鼻をすんすんと勢いよく吸い込み辺りをくるくる回るとリードを激しく引っ張り走り出した。

「ぺーーーーチーーーーー!!」蛍はグイグイ引っ張られて叫ぶ。

「大丈夫!!ペチはきっと家に帰る道を教えてくれてるんだ。」引っ張られる蛍の背中を押すボク、蛍は目を白黒させながら前から後ろから押されるのであった・・・。

あれから、とてつもない山道や獣道を通されたが最短距離で家にたどり着いた二人は疲れ果てていた。荒い息を整えてドアを開くとおばちゃんが心配しておりパタパタと出迎えてくれた。

「二人ともどこいってたのー、もうとっくに夕飯の時間よ。」

「ごめんなさい、蛍お姉ちゃんに色々案内してもらっていたら遅くなっちゃった。」ボクは謝ると、蛍お姉ちゃんは驚いて訂正しようとするがペチが蛍に飛びかかってじゃれ始める。

「わっ!ペチ、何するの!?」

「ペチお腹が空いてるんだよ、早くご飯あげないと。」ボクはペチのグッジョブにフォローを入れてこの話題をここまでに切り上げる。

「まあいいわ。蛍はペチの脚を拭いてご飯をあげて、ボク君は手を洗ってきなさい。」
「はーい。」二人は洗面所とお風呂場で各々の作業に取り掛かる。
　ボクは手を洗い、蛍はペチの脚を洗う。
「ボク君、ありがとう。私の事何も言わないでくれて・・・。」
「なんでもないよ、蛍お姉ちゃんの意外な一面が見れただけで楽しかった。」
「もうー。」フォローしてくれているのか、からかわれてるのかわからないボクの態度に蛍は眉をひそめるのであった。

「ボク君、・・・ボク君?」ご飯を食べた後、お風呂に入ったボクは長旅と想定外の散歩で寝てしまっていた。おばちゃんはそっと肩を揺らすが小さな寝息を立てて寝てしまっていた。
「長旅で疲れてるんだろう、東京から6時間はかかるからな・・・。よし俺が連れて行こう。」おじちゃんはボクを抱きかかえる。
「軽いな・・・。」おじちゃんの言葉に蛍が反応する。
「おとうさん、誰と比べたの?」
「ははは、すまん。蛍と比べてしまったよ。」おじちゃんにかかえられたボクは二階へと通され、ベットに入れてくれた。
　寝顔の可愛さにおじちゃんもおばちゃんもほっこりしてしまう。
「やっぱり男の子いいわねえー。」
「だな!」
「ちょっとー。お父さん、お母さん!」蛍は非難の声を上げる。
　二人は笑いながら下へと降りるのであった。
「もう!・・・おやすみボク君。」蛍はボク君にお休みを伝えると、ゆっくりと扉を閉めるのであった。

絵日記
8月1日　一条家に到着!いきなり迷子になって蛍お姉ちゃんと一緒に頑張った!

8月2日の早朝

ちゃん♪ちゃん♪ちゃ♪ちゃ♪ちゃ♪ちゃ♪ちゃ♪、ちゃん♪ちゃん♪ちゃ♪ちゃ♪ちゃ♪ちゃ♪・・・。

朝のラジオ体操で一際輝く異色の存在にボクは沈黙する。まるで体操とは違い、レッツダンシングする一人の少女・・・。

あ！「れっつ！ダンシングー!!」とか言ってる。ボクの視線はその少女に釘付けだった・・・。

「ム！誰なん？うちをじっとりみているあなたは!!」指をびしっ！とボクを指す。ラジオ体操の最後をうまく決めのポーズとしてダンスとミックスさせた無駄のない動き・・・、ある意味すごい。

「・・・・・あの、ボク・・・。」

「ムムっ！見かけない男の子なん！どっから来たですか!!」少女は腕をブンブン回しながら距離を詰めてくる、なんかこの子すごいな・・・。

「れんちゃん。この子私の従兄弟なの、昨日から私の家に来ているのよ。」蛍が助け舟を出してくれる。

「ほたるんの？むむー・・・。にゃんぱすー。」

「え？えと、・・・・・。にゃん、ぱす？」

「ほたるんと反応が同じなん！わかった、君はほたるんの従兄弟だ!!」何を納得したのかさっぱりわからないまま、疑惑を勝手に納得した少女は手を差し出して来た、次はなんなんだろ。

「宮内れんげなん、できましたら名前を教えてくださいなー。」

「ぼくはボクだよ。」握手をしながらそう伝えると、明らかに不愉快な顔をする。

「宮内れんげなん、できましたら名前を教えてくださいなー。」

「だから、ぼくはボクだよ。」というと、再び不愉快な顔をする。

「ほたるんの教育が悪いからこうなってしまったんな？よし！うちが矯正してあげるんなー。」

（れんちゃん、あだ名がつけられないから怒ってるんだ。）蛍はようやくこのれんげの事をわかり始めた今日この頃、ボク君に向いた牙に今日何かが起こると察してしまった。

「れんちゃん、それでどうするつもり・・・。」恐る恐る聞いてみる。
「ふっ、ふっ、ふっ！しれた事、新入りはまずなっつんの洗礼を受けてもらうまで・・・。」
「えっ！夏海先輩ですか？」蛍は聞き返す、れんげは仁王立ちして立ちはだかる。
「そうなん、なっつんのとびきり猛烈な洗礼を受けないと世知辛いこの場所で生きていけないんな!!」再び指差しされるボク・・・。
「えっと、よくわかんないけどれんげちゃんの友達を紹介してくれるのかな？ありがとう。」
「!!・・・ほたるんと違ったぽじてぃぶなあぷろーち。むむむ、ボクとやら、あなどれん・・・。はやくなっつんに会わさねば。」

「あんたたち！はやくこっち並ばんねっ!!スタンプやらんよっ！」ラジオ体操の係りのおばさんが怒り出した。よく見たらボク達以外はすでにスタンプをもらって帰り始めていたからだ・・・。
「なっつんのお母さんな、怒るとこわいんな。」れんげの言葉におばさんは再び雷を落とす。
「あら？この子みなれんね。どっから来たの？」スタンプを押しながら見慣れない顔に言葉が出る。
「私の従兄弟のボク君です、夏休みの間こっちで過ごす事になりまして・・・。」蛍が説明した。
「そうなのー。何も無いけど、時間と自然だけはいっぱいあるからうちの子達と遊びに連れて行ってもらいなよ。」
「うん、ありがとうおばちゃん。」ボクは頭を下げる。
「そうなん、今からなっつんのところにつれていくん。」れんげは鼻息荒く、おばさんに伝えた。
「え、夏海に？ロクな遊びしか教えんよ。」
「だからなん！なっつんにここの掟を体に覚えこませてもらうんな!!」スタンプが行き渡った事を確認したれんげはボクの手を掴んで引っ張り出す、蛍はそれについて行く・・・。
　残されたおばさんはあっけにとられ、見送る事しか出来なかった。

同じ行き先なのに・・・。

昔ながらの古民家のドアをチャイムを鳴らす事なく、れんげは開け放つ。

「なっつん!なっつんはいないのですか?」れんげの啖呵に現れるのは小鞠であった。

「どうしたの?夏海なら駄菓子屋に行ったけど・・・、その子誰?」

「私の親戚のボク君です。」

「もういいのん!挨拶はそろってからするのん!!こまちゃんもついてくるのん!!」れんげは駄菓子屋に向かい出す。

「強制かい!ってこまちゃん言うな!!私もやりたいことあるのに・・・。」

「すみません、先輩。」

「蛍が謝る事ないけど・・・、れんげを張り切らせるなんてボク君はなかなかやるな。」

「え?ぼく何にもしてないよ。」

「今はれんげの暴走に付き合うしかないか・・・。」小鞠はそういうと割り切って駄菓子屋に向かう。

(先輩巻き込まれるのに慣れすぎて、順応が早い・・・。)蛍はそう思うのであった。

駄菓子屋に着くと、れんげの言っていた夏海がいた。

サイダーを一気飲みして、プハーッとしている。

「なっつん!新入りなん!!」

「おっ!れんちょん、新入り?この子か?」

「そうなん!ぼくをボクと言って名前をいわないのん。」

「エクセントリックネーム!!れんちゃん、この子の名前はぼくと言うのだよ。な?ぼく!」

「うん、ぼくはボクだよ。」

「うそなん!名前には苗字もあるのん!!」

「れんちょん、時には苗字もない子もいるのだよ。そこは言ってはいけないぜ。」

「そうなん？」
「そう！れんちょんは物分かりがいい！」びしっ！と指を突き立ててポーズを決めるとれんげは納得する。
（納得するんかい!!）非難する・・・。
「名前の事は納得したん、ボクさんごめんなさい。でも！新入りはここでの掟を体に覚えないといけないんなん！なっつんからお願いします。」
「まーたわけのわからん事を・・・。
　ぼく君とやら、君は夏休みの自由研究を決めたのかな？」
「え？うーん特に決めてないけど・・。」
「夏休みはあっという間だ。決めてないと素晴らしい研究はできない！君にお題をあげよう、それができたら夏海先輩がここでの秘密を教えてあげよう。」
「どんな、秘密？」
「秘密だから、達成したら教えよう！」
「わかった！どんなお題なの？」
「一つはこのジェットサイダーの王冠集めだ！
　駄菓子屋は、昭和に流行ったジェットサイダーの復刻を見つけて入荷した。この王冠５０種を見つけてくる事だ。」夏海は今飲んだサイダーの王冠をボク君に渡す、その王冠には国旗があった。
「実はうちが集めていてコンプリート直前だったんだけど、母ちゃんに見つかって捨てられそうになって、逃げ回ってるうちにあちこちに散らばっちゃったんだ。駄菓子屋にあと3本残っていて、今うちが飲んだから４６個はこのあたりに散らばっている。川の中にもあるかもしれない、でも散らばる前に蛍光塗料塗っておいたから近づけば光って分かる。」
「これが研究になるの？」
「なる！なぜなら王冠のうらにはその国の特徴が書いてある、それを丸写しすれば各国の研究になる。」
「それで夏海あつめていたのかー。」小鞠が口を挟んだ。
「まあねー。でもそれだけではない！あの王冠を持っていると、水中

にいる時間が長くなる!ような気がする・・・。」夏海の話に全員がずっこけた・・・。

８月２日の午前中

駄菓子屋で朝早くから集まる子供達、ボク君に試練という課題を与える夏海はジェットサイダーの王冠５０種集めを丸投げした・・・。
「それがダメなら虫相撲でウチに挑んでもいいし、川釣りでウチ以上の釣果を叩き出してもいい！ウチに勝てる物があるならどーん！と挑んできたらいいさ。」夏海は胸を叩いてボク君を挑発する。
「ボク君、夏海先輩は強いから無理して勝とうなんて思わないでね。」
「そうそう、まぐれでも勝ったら夏海はしつこいから大変だよ。」
蛍と小鞠はフォローの言葉を投げかける。
「ねーちゃん！なんて人聞きの悪い事を!!ウチ負けた時は潔くボク君に秘密を教えるよ。」
「虫相撲で連続して負けた時、ザリガニ出してきたのはどこの誰だ！私のカナブンを返せ!!」小鞠は半泣きになりながら反論する。
「先週、小鞠先輩が見つけた大きなカナブンに夏海先輩の自慢のノコギリクワガタが負けて出したのがザリガニで、カナブンはその餌食に・・・。」蛍はボク君に耳打ちする。
「虫相撲とはいえ、甲虫たちはウチ達が作ったデスゲームに巻き込まれているのん！一夏の尊い犠牲はウチたちに大事なものを教えてくれているのな!!」れんげはしみじみと言う、小鞠は泣きじゃくりまだ夏海を非難していた。
「じゃあやめようよ。」ボク君の一言にれんげは顔をあっぷにして反論する。
「不幸な事故はあったけど、これは掟なん。夏休みと虫相撲は切り離せないこの地の祭なん!!」
「わかったよ、れんげちゃん。とりあえず出来ることからやってみるよ。」ジェットサイダーのトンガ王国の王冠を握りしめるのであった。

蛍とボク君は朝ごはんを食べる為に帰り道を例のジェットサイダーの王冠を探しながら歩いた。
「しかし、夏海お姉ちゃんも蛍光塗料を塗っておくなんてお母さんに

見つかるの想定内だったのかな?」ボク君は茂みを掻き分けながら蛍に話しかける。
「夏海先輩はそういうところは凄く勘がよくて・・・、それ以外は見抜かれてるけど。」
「ふーん・・・。あっ!あった!!」茂みを分けると太陽に当たって蛍光塗料が光る。スペインに続いて、アルジェリアの王冠が顔をだしていた。
「ボク君凄いねー。この調子だとすぐに見つけられるかな?」
「夏海お姉ちゃん、あちこち逃げ回ってなければいいんだけど・・・。」
「あー・・・。あの時のおばさん、相当怒っていて半日は夏海先輩を追いかけ回していたから・・・。川の中とか泳いで逃げてたよ。」
「川にも落としてるの?見つかるかな・・・。」
「ボク君、無理しないでね。」蛍はボク君を案ずる。
　一学期、蛍は引っ越してからここでの生活は都会と違い危険度が高い遊びがある事を知った。女子という事で無理はさせられなかったが、男の子であるボク君は夏海先輩に危険な遊びを共有しかねなかった。

　家にいる帰った二人は蛍のお母さんに出迎えられ、遅くなってしまった朝食をとる。
「そうそう、ボク君は機械が得意と聞いたけど。これできるかな?おばさんもおじさんも苦手で・・・。」
　差し出されたのが無線ＬＡＮのルーターであった。
「うん!ボクの家は全部ボクがやったよ。任せてよ!」
「うわあ、助かるわ!インターネットの契約は済ませたんだけど、ルーターの設定っていうのがわからなくて・・・。設定してもらうこともできるんだけど、この辺りでは結構な出張費取られちゃうのよ。」
「おばちゃん、でもお家が広いから一台じゃあ無線が行き届かないよ。」
「同じのもう一台あるけど、そういう使い方できるの?」蛍のお母さんは同じ筐体の無線ＬＡＮを取り出した、ボク君は筐体にある切り替え

スイッチを見て頷く。
「うん！これならできるよ。ブリッジにすれば二階もネットできるようになるよ。」
「うわあ、助かるわ！お駄賃弾むからお願いね。」蛍のお母さんは５００円玉を取り出すと、ボク君に渡す。
「おばちゃん、ありがとう！」ボク君は貴重な収入を得ると早速機材を持って設定を急ぐのであった。
　ボク君の活躍で一条家は無線ＬＡＮによるインターネット環境の整備と各種ＰＣ、タブレット、ゲームなどがインターネットに組み込まれて都心にいた環境へと変貌する、なにより携帯電話のアプリ全般がネットにより息を吹き返したのだ。パケットによる通話や、動画のやりとりができるようになったのは大きい。
　蛍お姉ちゃんも東京の同級生とビデオ通話をして喜ぶ事となった。
　そして、ボク君もネットを使った活動がひろがるのであった。
　にやり・・・。

　朝ごはんを食べたボク君は蛍に教えてもらってバスに乗り蛍達の学校へ向かった、正確には学校の裏にある山であるが・・・。
　蛍から借りた虫取り網と籠を持って虫相撲に使える甲虫の捜索と、ジェットサイダーの王冠探し、および昆虫採集、釣りをするポイントを確認する為である。
　あちこちの木を調べて回るが、甲虫は一向に見つからない・・・。
「うーん、虫の見つけ方を夏海お姉ちゃんに聞いとくべきだったなあ。」蝉時雨の中、汗を流して探し回る。田舎の蝉は都会と違って鳴き声が違う・・・。
　ボクの住んでいる町はジージーと鳴くアブラゼミや、シャワシャワうるさいクマゼミくらいしか聞けないがここではミンミンゼミが猛威を振るいうるさい・・・。
　夕方になるとカナカナカナカナと鳴くヒグラシと、ツクツクボウシが一日の夏の暑さを労うように鳴き始める。初日のボクはそこに印象を覚えた。

「あっ！」ボクは山の一角に野菜の畑を見つけて駆け出した。
目的はその横に積んでいる収穫後に刈り取った枯れ草の束、それを掘り返すように調べていくと目的の物が出てきた。
「やったあ！なんの幼虫がわからないけどそろそろ大人になるぞ。」ボクはその枯れ草と一緒に見つけた幼虫４匹を虫かごに入れ、成虫になるのを楽しみにしつつ即戦力を求めて山を探索するのであった。

午前中、虫探しに精を出しお腹が空いたので家を出る前におばちゃんからもらったおにぎりを食べながら午後の予定である川の探索を計画していた。
学校の裏に流れる川は浅瀬ばかりで魚は見つけられないが、釣りに使う生き餌を採取し、ジェットサイダーの王冠を見つける予定であった・・・。
「ノコギリクワガタ一匹だけかあ。まだ小さそうだしなあ、まだ完全に成虫でなかったら大きくなるかな？
駄菓子屋によって成長させる栄養剤とかあるか聞いてみよう。」もぐもぐしていると不意に後ろから声をかけられる。
「おっ！きみはひかげが言ってたボク君かいー、こんにちはー。」一人の女性が声をかけてくる。
「こんにちは、ひかげお姉ちゃんを知ってるの？」
「まーねー、私は宮内一穂。ひかげのおねえちゃんで、ここの学校の先生をやってるんだよ。」
「学校の先生なの？なんか先生っぽく無いね。」
「あっはっはっは、私もそう思うよー。ここには先生として自ら志願してくる人いないからねー。
大学で教員免許とったら授業料免除してくれる、っていってたからなんとなくそっちの方向にいっちゃったんだー。
私としては理系で、研究職したかったなー。」
「そっちは、もっと向いてなさそうだよ。」
「・・・初対面でここまで言うとはねー。」肩を落としてため息を吐く。
「くれぐれも気をつけてねー、熱中症にならないように水をよくのむ

んだよー。」手を振って帰っていく、おそらく学校からボクの姿をみて注意してくれたのだろう。向いてないは言い過ぎたかな。

頭をかいて一穂の後ろ姿にごめんをするのであった。

8月2日の午後

川で偶然にも王冠を見つけたボク君は釣りに使う生き餌もそこそこ手に入り学校を後にする。
帰りもバスに乗ろうとしたが、山と川を歩き回ってドロドロになっているのでためらったボクはそのまま歩いて帰ることにした。
太陽が真上にある上に遮る雲はなく、ジリジリとボク君を弱らせていった。
「帰りに駄菓子屋によってみよう・・・。」ボク君は帰り道にある駄菓子屋へ寄る事にした。
途中で町道のアスファルトの道へ乗り換えたボクはさらに体感温度が増したように感じる、その暑さを避けるようにすぐそこにあるトンネルに入って流れるとひやっとした空気が頬を撫でた。
その長いトンネルを抜けた先に、朝にれんげが教えてくれた駄菓子屋へついた。
「にゃんぱすー。」
「あっ!にゃんぱすー。」僕はなんとか謎の挨拶を返すと、れんげは再び店先のベンチで絵を描いていた。
「なんの絵を描いてるの?」
「具の絵を描いてるけど、朝に見たばかりなのにイメージができないのん。」
「ぐ?ぐってなに?お味噌汁の?」ボクは知る限りの情報を得て集めてみるが想像も出来ない、絵を見る限り動物に見える。
「具をお味噌汁に入れたらたぬき汁になるなん!ボク君はたべたいですか?」
「え?ぐって名前なの?ペット?」
「またウチの家にきたら教えてあげるのん。今は絵に集中したいからボク君は買い物をしてくるんな。」
「う、うん・・・。」ぼくはまだれんげの思考が分からず、混乱したままお店に入る。
とりあえず残ったジェットサイダーを取り、きな粉餅を一つ取ると

店番をしているお姉さんに渡す。
「うん？新入りか。・・・１７０円だ。」お姉さんにお金を渡して答える。
「うん！しばらくここで過ごす事になったんだ。お姉ちゃんありがとう。」
「へえー。何処の家に厄介になってるんだ？」
「えっ、と。一条さんのお家かな。」
「蛍ちゃんの家か・・・。なあ、君？必要な物があったらここで頼めば手配してやるよ。色々レンタルもしてるからぜひ声を掛けてくれ。」
「うん！ありがとうお姉ちゃん！
　実は、釣りがしたいんだけどお姉ちゃんの家には釣り道具がなくて・・・。」
「釣りかあ、ウチの家にあるけどレンタルするような物じゃないしな・・・。よし！サービスで夏休み中貸してやるよ。」
「え？いいの？」
「だだし！食べられる魚を釣った時はウチにも回してくれるのが条件、ってのはどうだ？」
「え？食べられる魚を釣れるの？」
「釣れるよ、主にマスだけどな。夏海はたまにヤマメを釣ってくることはあるけど、あれは大人でもなかなか釣れない貴重な魚だ。」
「夏海お姉ちゃんやっぱ凄いんだね。」
「あいつは遊びの天才だからな、その分人としての知能は失われているけど・・・。新入りは何か得意な物はあるの？」
「うーん。家ではインターネット接続とか、デジタル家電とか詳しいって言われるよ。うちのお父さんもお母さんもそういうの苦手だから。」ぼくはそういうと、駄菓子屋のお姉ちゃんは手を握ってぼくを見つめてきた。なんか捕食されるような気分で妙な怖さを覚える。
「この地に救世主がきた・・・。名前は？」
「え？ぼくはボクだよ。」
「ちょっときてもらおうか・・・。」店の奥、つまりこの家の生活圏に招き入れられる。そして机の上に一台の旧式なセパレート型のデス

クトップパソコンが置かれていた。
　電源スイッチを押しても、全く起動する様子がない。
「壊れちゃったの？これ、ＢＩＯＳも動いてないし、電源ＬＥＤも光ってないから多分電源ユニットが壊れてるよ。」ボクは見るなりそう判断する。
「!!・・・君は何者なんだ。」この辺りにいる子供とは一線を画していた。東京にはこんなサイバーな小学生がゴロゴロしてるというのか。楓は頭の中で逡巡した。
「んー、壊れたの最近？」
「？ひと月ほど前から調子が悪かったんだが、ここ数日でこのありさまさ・・・。」
「そうなんだ。お姉ちゃん、半田こてと壊れた家電ない？」
「え、半田こて？あー、あの溶かすやつか。あったような・・・。壊れた家電なら、ビデオデッキがあるな。」
「それなら治るかも・・・。」ボク君は壊れたデッキと半田ごてを準備してもらう間にパソコン内部を開ける。
　その瞬間に特有のすえた臭いで確信し、電源ユニットを開けると臭いの元をたどる。
　ちいさな基板の一つ、電解コンデンサの液漏れを見つけると準備してくれた半田で取り外して壊れた家電から電解コンデンサを探し出す。
「うーん、５０Ｖの９００μＦかあー。あ！５０Ｖ３３０μみっけ♪
　たしか、静電容量の時は並列に三つ繋げたらよかったかな？」半田でつなぎ合わせ、これもまたデッキから見つけたリード線で基板にとりつける。
　そして、電源を投入すると・・・。
「動いた！・・・。」ＢＩＯＳ起動が始まり、ハードディスクがカリカリと音をはじめた。
「今の内にデータをバックアップ取っておいて次のパソコンを買った方がいいよ。あちこちの電解コンデンサがパンク寸前だから、液漏れを起こして基板を焼かれたら直らなくなっちゃうよ。」

「うーん。今のデータを保持したまま次のＯＳに移行なんて私にできるかな・・・。オーバーホール、出来ないか？」
「出来ない事はないけど、延命してもＯＳがそろそろサポート切れちゃうし、そこまでするよりも買い換えた方がいいよ。」
「そっかあー。まあ、学生の時から使っていたからそろそろ限界か・・・。」
「うん！よかったらセットアップ手伝うよ。」
「助かるよ。・・・今回のお礼にボク君にはいい事を教えてあげよう。」
「え？なに？」
「夏海に釣果で勝ちたかったら、川じゃなくて池にいきな。あの池には主がいる。」
「ぬし？」
「ああ、残念ながら食べられる魚ではないけど、奴を釣り上げられたらここらで一番デカイ魚を釣り上げた事になる。」
「そんなに大きいの！」
「ああ、ボク君よりも大きいくらいだ。
　でもあれを狙うとなると相当な仕掛けがいるだろうし、池に持っていかれる可能性もある。それなりに慣れてから狙うようにな。」
　楓から貴重な情報を得る事ができ、釣竿を手に入れたボクであった。

8月2日の夜

楓の家でのパソコンの応急処置で遅くなったぼくは、そのまま楓お姉ちゃんの所で食事をご馳走される事となった。
外にいたれんげちゃんと共に楓お姉ちゃんの夕食を頂き、昼間ドロドロだったボクはパソコンのメンテナンスでさらに汚れた為に洗濯機にかけられ、更にお風呂にまで入る事となった。
楓お姉ちゃんは二人の家に連絡まで入れてくれていたので心配される事はない。
「はあ、なんだかボク環境の激変についていけないな・・・。」一昨日まで自宅にいて昨日は一条家、そして今日は楓お姉ちゃんの家で夕食・・・、湯船でぼーっと考えていた。
「ボク君はもうほーむしっくになったんか？」
「!!」突然の返答に驚き、振り向くとれんげちゃんが普通に頭が泡だらけの状態で洗っていた。
「びっくりしたー、れんげちゃんいつのまに・・・。」
「普通に入ったら、ボク君が考え込んでたから普通に入ったのん。」頭をわしわしと洗いながらあのいつもの吸い込まれるような目でこちらを見据えていた。
「あの・・・。女の子が普通にお風呂に入ってくるっておかしくない？」
「そうなん？お風呂は一緒に入ると楽しいのん？よくねえねえや駄菓子屋と一緒に入るけど？」景気良くお湯をぶっかけて洗い流すとジャンプして湯船に飛び込むと、その衝撃にボクは湯船に沈んだ。
「うわっ！れんげちゃん！暴れないで・・・。」
「ボク君、覚悟なん!!」どこから取り出したのか、水鉄砲で襲いかかるれんげ、ボクは咄嗟に桶でガードする。
「甘い！」れんげは更にハンドガンタイプからタンクタイプの水圧のある水鉄砲に変えると一気に放水する。
桶に突然かかる水圧にボクは桶を落としてしまうと、れんげは再びハンドガンに持ち替えてボクの上体を抑えつつこめかみに突きつける。

「ちぇっくめいと、なん!!」勝ち誇るようににやりと笑うれんげちゃん、この子は一体何を考えてるんだ?
「ん・・・?んんん?」れんげは抑えていた左手を湯船からだしてその不思議な感触に目をぱちぱちさせた。
「ボク君のお腹付近に柔らかい物があたったんな・・・。」
「こらー!れんげ!!」楓がさらに乱入する。
れんげを引きずり出すと、手早くバスタオルを巻いてボク君に謝罪する。
「すまんなボク君、れんげなりにボク君を歓迎してのことだから許してやってくれ。」
「まつのん!ボク君はお腹に柔らかい物を隠し持ってるのん!」
「・・・心中察する。れんげには言い聞かせるから今日の所は勘弁してやってくれ。」楓は一礼すると騒ぐれんげにかるくげんこつを入れると風呂場を後にした。
ボク君は呆然と見送った後・・・。
「ぼく、お婿にいけないのかな?」湯船に沈みながら、一言呟いたのである。

恐る恐る出てきたボクは、またれんげちゃんの奇想天外な行動に目を白黒させる・・・。
先程巻かれたバスタオルをまるで日本古来の綿帽子のように装着し、三つ指ついてボクにひれ伏していた。楓はもう額に手を当てて事態が収拾できずに、匙を投げている様子である。
「な、何してるのれんげちゃん。」聞くのが怖い、ボクの心の中でよくない予感だけが胸をよぎっていた。
「ごめんなさい、のん。」
「え?」
「どうやらウチは知らぬとはいえ、ボク君の大事な所をさわってしまったみたいなん。駄菓子屋に聞けば、そこは他人がさわっていいものではないと聞き大いに反省していた所・・・。」
「れんげちゃん、大丈夫だよ。知らなかったことだし、ね?」なんとか

いい方向に改善させようとするボクにれんげちゃんは目を潤ませる。
「なんとお心の広いボク君なん、れんげは感動しましたん!!こうなれば他人ではなく、ボク君のお嫁さんになるとまで誓っていた所なんな!!」
「どっひゃー!!」ボクはその場で腰を抜かしてしまう。楓はもう、後ろから両手を合わせて謝罪の意を表明している。おそらく風呂場の件を説明しているうちにれんげちゃんが間違った認識をした上に誤解を与えたのだろう・・・。
「れんげちゃん、ボクはまだ子供だから大丈夫だよ。」
「いつまでなら大丈夫なん?」
「わかんない、でもとりあえず今は大丈夫だよ。だから気にしないで遊ぼう!」れんげを励ますように伝えるとようやく少し笑顔を見せる。
「・・・よくわからないけど、ボク君が大丈夫ならわかったなん!またお風呂で一緒にあそぶなんな!!」
(しまったあああー!!)楓とボク君は心の中で墓穴を掘っていた事に後悔するのであった・・・。

その後楓に送ってもらい、一条家に戻ったボクは借りた釣り道具を確認しながら明日はどこで釣ってみようかと色々考えていた。
「ボク君おかえりなさい、今日は駄菓子屋さんでご飯を食べたんだって?」蛍がノックした後、ホットミルクを持ってボク君に渡す。
「蛍お姉ちゃん、ありがとう。」
「絵日記、今日は何を書くの?」蛍の持つカップはコーヒー、一口飲むと覗きこんだ。
「うん、でも今日は色々ありすぎて何を書こうか悩んでるんだ・・・。」
「そうなんだー。羨ましいな、私なんてあれから家で人形作って、お母さんと買い物に出かけただけだもん。」
「ボクは学校の近所で王冠と甲虫を探して、駄菓子屋さんでパソコンを直したよ。そのあとご飯食べて、れんげちゃんとお風呂に入って・・・。」

「ふえええ！れんげちゃんとお風呂？ボク君、なんて事を！」
「だって後から入ってきたんだよ、その後水鉄砲で酷い目にあったよ。」
「おははは・・・、れんちゃんならやりかねないかな・・・。
　でもボク君、女の子とお風呂なんて入っちゃダメだからね。」
「蛍お姉ちゃんとも？」
「はわわわわ!!だ、め、ですー！」
「そうなんだ？蛍お姉ちゃんなら、昔入ったからいいのかな？と思ったよ。」ボク君は絵日記を描きならが返した。
（よかった・・・。もしこの話題にならなかったらいつか突然入ってきたかも・・・。）蛍は胸をなでおろして安心したのだった。
「さあ、明日もラジオ体操あるから早く寝たほうがいいよ。ボク君おやすみなさい。」
「うん、わかったよ蛍お姉ちゃん。おやすみなさい♪」

～絵日記～
8月2日
駄菓子屋さんのお家でれんげちゃんとお風呂に入った、仲良くなれたのはいいけどお嫁さんになられたらちょっと困る。

8月3日の朝

ラジオ体操を済ませて一条家で朝ご飯を食べるボク君におばちゃんから声がかかる。
「昨日加賀山さんのお家でパソコンを直してあげたみたいね、すごく喜んでたよ。」おばちゃんが、やけた目玉焼きのお皿を置きながら伝えた。
「うん！あり合わせの部品で直ってよかったよ。」
「小さい時から機械いじりが好きだったけど、そんなことまで出来るようになったんだ。」
「うん！近所にいる博士から教えてもらったんだ!!変な物ばっかり発明しているおじちゃんだけど、すごく電気の事知ってるんだ。」
「へえー、ボク君はすごいなあ。じゃあ今度の休みにおじちゃんのノートパソコンを見てほしいな。」おじちゃんが突然話にはいってくる。
「あら？最近買い換えたばかりのノートパソコンもう調子が悪いの？」
「あ、ああ・・・。ちょっとばかりな・・・、今度の日曜日にでも見てくれるかい？」
「うん！わかったよ。」
「ボク君、私のゲーム機も見てほしいな・・・。」蛍もボク君の技能に依頼する。
「ボク君大人気ね♪」おばちゃんはにこにこしながら食事の準備を急いでいた。
・・・　・・・　・・・・　・・・・
・・・・・
「ごちそうさまでした！」家族の朝ごはんが終わるとおじちゃんは早々に車に乗って仕事へ向かう。
おばちゃんは今日も買い出しで街までいくそうだ。
ぼくは釣り道具の手入れを終えた頃、蛍がノックと共に入室する。
「ボク君、明日みんなで海に行くんだけど、よかったら一緒に行く？」

「海？」
「電車でちょっと遠出になるんだけど、どうかな？」
「うん！行きたい!!」
「よかった、じゃあ明日は朝ご飯を小鞠先輩の家で食べて出発するみたいだから遅れないようにね。」
「わかった！ありがとう蛍お姉ちゃん。」
「うん！今日はどうするの？」
「楓お姉ちゃんから釣り道具借りたから釣りをしにいくよ、蛍お姉ちゃんは？」手入れした釣り道具を見せながら答えるぼくに行くあてのなさそうな蛍は考え込む。
「じゃあ私もペチの散歩ついでに一緒に行っていいかな？」
「うん！一緒に行こう、蛍お姉ちゃんと遊びにいくなんて久々だなあ。」ぼくの喜びように蛍も微笑む、弟ができたように嬉しくなるのであった。

楓から聞いた例の池に向かう。新たな道なのでジェットサイダーの王冠を探し、さらに珍しい虫を見つけては虫取り網で捕獲する。
「ボク君、すごい荷物の多さだね。持ってあげようか？」蛍はその重装備に驚く。
虫取り網に虫籠、釣り道具には釣竿と、おじちゃんから借りたキャンプ用のクーラーボックス・・・。
まるで学期の終わりに置き教科書をしまくり、朝顔の鉢植えやらをまとめて持って帰る一年生のようになっていた。
「ちょっと、失敗だったかも・・・。でも釣りに来ていた時に虫相撲に使える甲虫が出てきたら・・・。」
「ボク君欲張りすぎだよ、じゃあ虫取り網と虫籠持つよ。」まるでお姉さんのようにたしなめた蛍はぼくから受け取った。
「ありがとう、お姉ちゃん。」この笑顔に蛍は弟を持った気分になり、満更ではない気分になる。
「あっ！蛍お姉ちゃん！珍しい蝶々が!!とって！」
「え！えええ～！」蛍は突然の指令に混乱するのであった。

そんなこんなで余計な時間をかけたがジェットサイダーの王冠を一つ見つけることができた、池に着いた時は蛍はもう息を切らしながらへたり込んだ。
「さあ!やるぞー!!」ボクは初めてだらけの経験に疲れを忘れて竿を振り回す。
「ボク君すごいねー、・・・私少し休憩するね。」蛍は木陰に入ると木にもたれかかって様子を見る事にする。
ペチはボクの横で何をするのかと興味津々で尻尾を振って走り回る。
さっそく餌と重りを取り付けて竿を振るとヘロヘロと飛んでいき、トプンと落ちていく・・・。
「これでいいのかな?」ボクはネットで見たとおりにしたつもりだが、心許ない・・・。とりあえず黙って手応えを待った。

「こないね・・・。」ボクは呟いた・・・。
「うん・・・。」蛍も小さく返す。
あまりにも当たりがなく、退屈になった二人は竿を固定して体育すわりで池を眺めていた。ペチは退屈ですっかり竿の横で寝てしまっている。
「退屈だね。」蛍は立ち上がると軽くお尻を叩いて夏草を落とす。
「うん・・・、夏海お姉ちゃんは意外にも我慢強くまってるのかな?」
「・・・・・・。」蛍は思い浮かべる。夏海は絶対におとなしく待つタイプではない・・・、下手をすれば飛び込んで魚がいるかどうか確認するくらいではないかと思ってしまった。

「ねえ、ボク君?魚が釣れるまで私と遊ばない?」
「え、どんな?」
「せっせっせー、でもどうかな?女の子の遊びだけど・・・。」
「うん!やってみたい!どんな遊び?」ボクは立ち上がって蛍の前に立った。

「リズムをとって相手の手と動作を合わせる遊びだよ。」そういうと蛍は歌い出して、一人でその動作の見本を見せる。
「せっせっせっー、のよいよいよい♪
アルプスいちまんじゃーく♪こやりのうーえで♪
アルペン踊りをさあおどりましょ♪
らんら、らんらんらんらんらん、らんら、らんらんらんらんらん♪
らんら、らんらんらんらんらん、らんらん、らんらんら♪」
まるで優雅に手を突き出す蛍にボクは目を輝かせた。
「すごいや！蛍お姉ちゃん！これを二人で振り付けして手を合わせるの？」
「そうだよ、綺麗に合うと気持ちがいいよ。ゆっくりやってみよっか？」
「うん！」そして二人は歌いながらせっせっせーに励む。
はじめの1回目は散々たるもので蛍から
「かなり間違えちゃったね・・・。」と言われてしまうが、2回目、3回目と繰り返す事で随分と慣れていく。

「・・・らんら、らんらんらん♪へいっ♪」ようやく、間違い二回くらいで合うようになり楽しくなっていた。
「ボク君、すごいねえー。もうちょっとでゆっくりコースを達成できそうだよ。」
「まだ、これでゆっくりかあー。でも女の子の遊びもハードだね。」
「もう一人いたら、ゴム跳びも教えられるんだけど・・・。また今度ね。」
二人は笑い合うと、ペチが鳴いているので振り向いた。
「ああ！かかってる!!ボク君引いてるよ!!」
ペチは固定した竿が池に持っていかれそうになっているので咥えて戻そうとしているが、引きが強くてペチごと引き摺り込まれそうになっていた。
ボクは慌てて竿を取って引っ張る・・・。
「うわあ！さかなってこんなに引っ張るの!!」

「ううん!これは大きいよ!!見て・・・。」池から見える影は相当大きかった、太陽が池越しに浴びる魚影は鱗が光って綺麗に反射する。
蛍も加わる事で力は均衡するが、持久力は魚の方にあった。
維持できなくなった二人を察したのか、ペチが糸を噛み切って戦いは終了する。
二人はその魚影が底に沈んでいくのを見守ることしかできなかった・・・。

8月3日の午前

「あーあ・・・、惜しかったなあー。」坊主で引き上げるぼくと蛍はさっきの手応えを感じながらとぼとぼと次の行き先へと向かう・・・。
「でもあれ以上は無理だよ・・・、池に引きずり込まれたか竿を持って行かれたかもしれないよ。」
「あれを釣るには工夫がいりそうだね、なんか考えてみるよ!・・・それよりも蛍お姉ちゃん力強いね。」
「え・・・、そうかな?」蛍は首を傾げて答える。
「だって、あの魚にボクが持って行かれかけたのに蛍お姉ちゃんが参加したら少しだけの間だけど互角だったよ。」ぼくの言葉に蛍は手を振って否定する。
「きっと咄嗟の力だからだよ、私そんなに強くないから。」
「そうかなー、まあいっか!蛍お姉ちゃん、れんげちゃんのお家はこっちなの?」
「うん!もう見えてきたよ。」指さしている大きな民家、おそらく農家なんだろう、納屋には農具があって印象的な古民家であった。
「ほたるんー!ボク君ー!こっちなんなー。」庭の方から呼ぶ声に、玄関口に荷物を置いて庭に回る。
「れんちゃんおはよう、ってこの子は誰?」蛍は挨拶するなりれんげのとなりには同い年くらいの女の子が立っていた。手にはカメラを持ち、控えめな女の子・・・。
「さっき知り合ったのん、ほのかちん!」
「いしかわほのかです、おはようございます。」丁寧に頭を下げる彼女に、二人は名乗って挨拶を返した。
「へえー。夏休みでお父さんの実家に?ボクと似た感じだね、ボクも東京から来たんだ。」
「ボクさんも?近かったら何処かで会えますね。」二人の東京会話が面白くないれんげは話に割り込む。
「ボク君はもっと遠慮するなん!せっかく同い年の友達ができた所なのに野暮はなしなん!」何故か片手に野菜の入ったバケツ、そしても

う片方の手には大根を振り回してぼくを威嚇する。
「あぶないよ、れんげちゃん！それよりその野菜は何？」れんげの手を掴んで大根直撃を防いで質問すると、れんげは大人しくなりくるりと背を向ける。
「そうだったのん、ほのかちんに具を見せようと思って準備したのん。」
「あ！駄菓子屋さんで言ってた具の事？ぼくも見たい！」
「ボク君は駄目なん!!ほのかちんともっと仲良くなるにはボク君は邪魔なんな。」
「がっくし・・・。」下を向いて落ち込むぼくに、蛍は頭を撫でて慰める。
「まあまあ、今はれんちゃん同い年のお友達ができて邪魔されたくないだけだから・・・。」ほのかちゃんとれんげは楽しそうに庭の隅に行く様子を見送るのであった。

「おーい！ほたるんー、ボク君ー。」ちょうどいい所でお声がかかる二人、振り返ると夏海と小鞠が大きな籠を持ってきていた。
「あ、ボク君来たよ！」
「うん！」
「おー！ボク君。夏休みは満喫しているみたいだな？しかし、昨日の今日でこの夏海ちゃんに挑んでくるとはいい度胸だ。」
「うん！まずは挑んで見ないことにはわからないから！」
「少年、よく言った！夏海ちゃんの最強軍団にいきなり勝てると思うなよ、さあ来い!!」夏海は木陰にタンバリンを置いてボク君の前で胡座をかいて座る。
「またはしたない格好して・・・、夏海、お母さんに怒られるよ。」
「母ちゃんの話はなしだよ、ねーちゃん！それにホットパンツなんだからいいでしょ、ぱんつ見えないんだし！」
「はあ・・・。」小鞠はため息をついて後ろに下がる、ホットパンツでも胡座をかけば充分はしたないとなぜ気づかない？　そう思って小鞠は妹の今後を考え頭が痛くなった。

「さあ、来いボク君!!」夏海は様子見とばかりにノコギリクワガタを出す。彼女の持つコレクションの中で一番大きいのだろう、ぼくが持つノコギリクワガタよりも明らかに大きい・・・。
一つ生唾を飲み込むとぼくは取り出す・・・、唯一自分の手で取ったノコギリクワガタを・・・。
そっと置くとぼくのノコギリクワガタは元気よく手から離れる、夏海先輩は勢いよく置くと背中を押して発破をかけていた。
「ふっふーん!ボク君・・・。ノコギリクワガタは体力がある、背中を叩いて興奮させた方が気性が荒くなって攻撃的になるんだよー。」
「え?・・・そうなんだ。」
「さあ、もう遅いよ!私のストームジェット!!いけー!!」夏海先輩の号令にノコギリクワガタは発信する!!その名の通り羽根を羽ばたかせて、森へと消えていく・・・。
「ああー!私のストームジェットー!!・・・カムヒアー!!」叫ぶ夏海を他所に、ストームジェットは、森へと還っていった・・・。
「ノー!ストームジェーーーット!!」夏海は還っていったストームジェットを求めて夏海はダッシュする。一堂ポカーンと口を開けて呆然とする中、小鞠だけはいつしかのカナブンの怨みとばかりに爆笑した。
「これって・・・、ボクの勝ちでいいのかな?」
「うん・・・。ボク君の勝ちだね・・・、夏海が納得するかどうかはわからないけど・・・。」小鞠はボク君の手を上げて勝者宣言をする中、蛍は驚愕の表情を浮かべていた。
「じゃあボク君!代わりにこの小鞠お姉さんが受けて上げましょう!!私の優雅なカナブンやカマキリ達の技に翻弄されるがいいわ!!」ビシッとボク君に指差していた。
「小鞠先輩・・・、先輩の籠の中にザリガニがいます。」
「えっ・・・?ってぎにゃあああ!!」小鞠の籠の中にいたカナブンとカマキリは無残にも夏海のザリガニによってまたしても餌食となっていた。今の世の中ではモザイクがかかってみることはできないが、昭和の時代を代表して言おう・・・。

夏海のザリガニがあるゲームの魔王のように、はらわたを引き裂いて食い尽くしていた。
「アホ夏海ーー!!」小鞠の怒りが爆発するのであった。

「あっちが騒がしいのん。」れんげが怪しい口笛で呼んだ具が一心不乱に与えられた野菜を食していた。
「れんげちゃんのお友達は楽しそうね、あんなに大きな友達もいて羨ましいな。」ほのかは具の頭をそっと撫でながらクスリと笑う、そして具にカメラを向けてその瞬間を収めた。
「ウチがいないとグダグダなんな、全く・・・。」水皿を具に差し出すと美味しそうに飲み始める。
「そうだ!ほのかちんは明日も用事ないならウチと海にいくの!きっと楽しいのん!!」
「え?明日も大丈夫だけど、お家の人に行っていいか聞かないと・・・。」
「ウチもたのんであげるん!だから今からいくんな!!」
「う、うん!!私も海に行きたい!!お父さんとおばあちゃんに聞いてみるよ!!」二人はすっかり親友になり、明日の海への期待はどんどん膨らんでいく・・・。
今年の夏は一層暑く、深くなっていくのであった。

8月3日の午後

「あーあ、散々な目にあったー。結局ストームジェットは山に帰ったし・・・。」夏海がとぼとぼと駄菓子屋に向かう中でグダを巻いていた。
「私なんて、カマキリもカナブンも・・・。」本気泣きする中二を慰める小五の蛍、ぼくはシュールな光景に言葉も出なかった。
「ねーちゃん、ごめんってばー。あたしのカゴに入りきらなかったらお邪魔させたんだけど・・・。」
「だからって、勝手にザリガニ入れるなんて・・・。」もう怒りを通り越して悲しみしか出てこない小鞠はさめざめとしていた。
「夏海先輩、せめて小鞠先輩が気に入りそうなカナブンかカマキリを見つけましたら代わりにお返ししてあげませんか?あまりにも気の毒すぎます。」蛍の言うことも尤もだ、夏海は再度小鞠に謝り蛍の提案を聞くことにする。
　これで一応の決着が着き、四人は駄菓子屋へとむかった。ちなみにれんげとほのかは二人で遊びに行きたいと別行動をとっている。
「あ!卓先輩にこのみさん!」蛍は駄菓子屋にいる夏海と小鞠のお兄さんである越谷卓とお隣で高校に通う富士宮このみを見つけた。卓は虫取り網を持ち、このみは籠を持っている。
「・・・・・・・・・・・・。」
「おーい!みんなやっほー!」このみちゃんの言葉で中にいたひかげまでも出てくる。
「おー、みんなきたか。」
「あれー?みんなどうしたん!」夏海がひかげに近くなり、ひかげは夏海の頭にチョップを落とす。
「お前のせいだ、小鞠を泣かすからこのみちゃんに連絡してメガネを連れ出して代わりの虫を探させていた所だ。」
「そうだよー、夏海ちゃん。あまりに小鞠ちゃんが不憫だったからメガネくんに説明してすぐに探させたんだよ。」
「・・・・・・・・・・・・。」キランと卓のメガネが光る、このみの持つ虫籠には沢山の虫や甲虫が入っていた。このみは小鞠にその籠を渡

す。
「わ！すごいや!!大きくて、いろんな種類が入ってる!!」ぼくは籠を覗き込むと夏海よりも大量の虫たちに驚きを隠せない。
「おにいちゃん、私のために探してくれたの？」
「・・・・・・・・・・・。」こくんと頷く。
「ありがと、おにいちゃんー。」抱きつく小鞠に卓は優しく頭を撫でてあやしていた。
「あー！ずるーい！・・・ねえ、すぐるお兄ちゃん♪私にも何かちょうだーい、ねえーってばー。」
「なつみちゃん！ちょっと！」このみちゃんの言葉は穏やかだが迫力を感じる・・・。夏海もすぐ様大人しくなるのである・・・。

「おー、ぼく君ー。３日ぶりだけどこっちには慣れた？」ひかげがぼくの頭にポンと手を乗せるとにやりと笑った。
「うん！凄く楽しいところだね、みんな面白くて毎日あっという間に終わっちゃうよ。」
「そっかー、それは良かったねー。・・・そうそう、れんげが君と結婚するーとか言ってたけど・・・。なんかあった？」そっと小さい声でぼくに伝えてきた。
「・・・できましたら黙秘でお願いします。」一謝りしてその先を言う事を拒否する。
「まあよくわからんが、れんげはしつこいタイプだから絡まれたボク君は大変だと思うよ。まあ頑張んなー。」肩を叩いて発破をかけると駄菓子屋の中へと入って行った。
「君が噂のボク君だね？こんにちはー、私は富士宮このみでーす。」
「こんにちは！このみお姉さんはみんなと一緒じゃないけど普段遊んでないの？」
「高校に通っているからね、部活とかもあって常に一緒に遊んでいるわけではないんだ。」
「そうなんだ。じゃあ一緒に遊べる時はレアなんだね。」
「おははは！面白い言い方だねー、元気な男の子でよろしい！この辺

では男の子が卓君だけなんだけど、あの通り無口だから・・・。喋る男の子は君だけだよ、やっぱり男の子はかわいいなあー。」片膝を落とすとにこやかにぼくの頭を撫でてくれた。
「ところでみんななんで駄菓子屋さんに集まってるの？」
「私とひかげは携帯電話持ってるんだけど、この辺りは殆ど圏外なんだ。最近この菓子屋が無線ＬＡＮを導入したから、ここで使わせてもらってるんだ。」
　ベンチにはこのみの携帯電話があり、確かにキャリアとして圏外になっている。
「ひかげは東京の高校だから、さっきからアプリ電話で宿題を見せ合ってたよ。
　でも楓さん、最近商売上手でここで買い物しないと使わせてもらえないんだ。パスワードも１日経つと変わるように設定されてるし、一定時間経つと接続が切れるからまた買い物しないといけないし・・・、誰の入れ知恵なんだか。」
「ぎくり・・・。」先日のＰＣ修理の際に楓さんに提言した方法が瞬く間に広がっていた・・・。

・・・先日の回想・・・
「じゃあ、お菓子を買ってくれた人に無線ＬＡＮを提供すれば売り上げが安定しない？」
「そんなことができるのか！無線ＬＡＮはあるが設定がわからんしＰＣはこれ一台だけだから押入れで眠っているぞ。」
「アドバンスモードでＬ２設定にできるから楓お姉ちゃんのネットワークには入らせずにイーサネット接続できるよ。ＭＡＣアドレスを検出して接続時間で制限かければ自動的に接続も切れるようにできるし、インスタントパスワードも発行できるよ。」
「言ってることがさっぱりわからんが、とりあえず任せた！駄菓子屋の経営改善には君の力が必要だ！ぜひ頼む、上手く行ったら特別待遇を用意しよう！」
「うん！任せてよ!!」

・・・・　　・・・・　　・・・・・　　・・・・・・

僕の脳裏に浮かんできた・・・。

ちらりと店の奥をみると楓が鋭くこちらを見ていたが、表情は穏やかで笑顔を見せている。

(余計な事は言うな・・・、待遇なしにするぞ・・・。)

聞かなくても、何を訴えているかよくわかる。ぼくはとぼけるようにこのみの言葉に適当に相槌を打って返すことになった。

多分、この接続をぼくがやったとなると富士宮家、越谷家、宮内家にも無線ＬＡＮが導入されて、ようやく手に入れた収入源が落ちるからだろう。ぼくは一番教えてはいけない人にこの特技を披露してしまった事に少し後悔してしまうのであった。

「どうしたの?ボク君、顔色が悪いよ?」蛍が覗き込んで心配した。

「蛍お姉ちゃん、ぼくが機械に強い事・・・。周りに言わないでね。」

「え・・・?う、うん。わかったよ。」蛍は懸念の表情をするがぼくの顔色の悪さに察して理由は聴かずに承諾してくれた、その優しさに感謝する。

「みんな!今日は私からの奢りだ!楓特製のお好み焼き、食って行ってくれ!!」紙皿にのった一人一枚づつのお好み焼きに、オレンジジュースまでついてこの場にいる全員に配っていく・・・。

「阿漕な商売の駄菓子屋がサービス!!嬉しいけど、明日みんなで海水浴に行くんだよ・・・。天候が心配になってきた。」

「お前は食うな、・・・帰れ。」夏海の言葉に楓は店の外を指差して退場を促す。

「楓お姉様のご厚意、みんなも感謝して食すように!」夏海はみんなにそういうと、紙皿を礼儀正しく受け取った。

ぼくが受け取る番の時、楓はこう言った。

「次もいい案楽しみにしてるぞ。」ぼくの夏休みが凍った一幕であった・・・。

８月３日の夜

晩御飯を食べ明日の海に行く準備を蛍と共に行なっていた時、不意に呼ぶ人は珍しく早くに家に帰ってきたおじちゃん・・・。

どうやら先日言っていたノートパソコンの調子が悪いらしく、ぼくを頼ってきた。

「うん、わかったよ！それでおじちゃん、そのパソコンは？」

「今おじちゃんの部屋にあるんだ、きてくれるかい？」ノートパソコンなのに、持ってこなかったんだ？ぼくは疑問符を頭につけながら部屋に行く。

「蛍、すまないけどボク君を少し借りるよ？」

「う、うん・・・。わかった。」蛍も少しおかしいな？と思いつつ、素直な性格の蛍はそれ以上の事は無く準備を再開した。ぼくは二階のおじちゃんの書斎に入り、パソコンを除くとすぐにおじちゃんが挙動不審になっているのがわかった・・・。

「・・・・・・。」ぼくの目はどんどんと輝きをなくしておじちゃんに向き直る。

「い、いやあー。ネットを見ていると変なサイトをのぞいちゃったらこの有様で・・・。」おじちゃんのパソコンは未成年のぼくには見せてはいけないようなサイトが強制ポップアップされ、消したければこの口座に振り込めとなっていた。

「おじちゃん、まさかとは思うけど・・・。お金払った？」

「・・・・・・。」

「払ったんだね？」

「・・・払いました。」

「はあ、おとなって・・・・・・。」その口座に振り込む金額は決して安くない、ジェットサイダー５０本ケースを三つくらい買える金額である。

すぐさまブラウザ設定を見るがキャッシュを消してもブラウザがロックされているのか見た目は変わっても内部は書き変わった様子はない・・・。隠しフォルダを見えるように設定しても見えてこな

い・・・。
「おじちゃん、以前使っていたパソコンはまだある？」
「え、そこの机のパソコンがそうだけど・・・。」指差すと旧型のデスクトップパソコンが置いてある。ぼくは精密ドライバーでパソコンの底面を開けてＳＳＤを取り出し、同じくデスクトップパソコンも同様に開けてＳＡＴＡ接続部の空きスロットに差し込んだ。
「ボク君、一体何を・・・。」
「レジストリーレベルで書き換えないと直せないんだけど、そんな細かい設定覚えてないから、別のパソコンからアクセスして隠しフォルダを表示させてキャッシュとか履歴とかを消してやれば治ると思うけど。多分一緒にウイルスを仕込まれていると思うから、完全に治すなら再セットアップがオススメだけど・・・。」
「それは困ったなあ、仕事関係でも使ってるのに・・・。」
「仕事で使っているパソコンでこんなことしちゃ駄目だよ、職場にウイルス持ち込んじゃうんだから。」
「は、はあ・・・、反省します・・・。」
「それでおじちゃん？これはいつこうなっちゃったの？」
「ボク君がくる１日前だから７月３１日だよ。」
「じゃあ、まだなんとかなるよ。」ぼくは旧パソコンで隠しフォルダを見つけてまとめて削除すると、元のノートパソコンに戻して立ち上げてＯＳ標準装備の復元機能をクリックし、復元ポイントを確認する。
「これでとりあえず裸の女の人は出てこなくなったけどウイルスが入ってる可能性があるからネットには繋がないでね。ウイルスソフトを入れて確認してから、ここの復元ポイントで戻れば完了だよ。」
「いやあ、ぼく君助かったよ！ありがとう、明日にでも電気屋さんで買ってくるよ。」
「そうした方がいいよ。今回は大したことなかったからこの程度で済んだけど、下手すればパソコンの中身を全部ネットに晒したりパスワードを盗まれたりもあるんだからね。」
「今度から気をつけます・・・、しかしながらボク君は本当にすごいね。その技術を使えば今からでも仕事ができそうだ。」

「じゃあ、おじちゃんからお仕事で報酬もらおうかな？」
「も、もちろんだよ。子供も仕事をしたからには報酬は払わないとね。」おじちゃんは財布を出し始め、５００円を渡す。
「おじちゃん、口止め料はいいの？」
「ぐ！ボク君は大きくなるといい大人になりそうだね・・・。」おじちゃんはさらに５００円をぼくの手に置いた。
「おじちゃんありがとう！秘密はぜーったいに守るからね。」
「なんか情けないけど、おじちゃんとの男の約束だよ。」
「うん！」拳を付き合わせて二人は本当に情けない拳を交わすのであった。

おじちゃんとの約束を終えると、ぼくは再び一階に降りると蛍が荷物準備を終えたところだった。
「あっ！お父さんのパソコン終わった？こっちも終わったよ。」
「おそくなってごめん、蛍お姉ちゃん。」
「ううん、いいよ。それよりもボク君、スイカ切ってもらったから食べよっか。」
「～♪」二人は縁側に足を放り出して種を飛ばしながらスイカを食べる、土の庭に落ちる種がいつしかどちらがより遠く飛ばすか競争になり、気づけば顔を真っ赤にして飛ばし合っていた。
自然と吹き出す笑い声・・・。
「蛍お姉ちゃんは大きくなったけど、子供っぽいね。」
「だから私あんまり変わってないよ、まだまだ子供だよ。」
「でも、おばちゃんが蛍お姉ちゃんの服は婦人服売り場に行かないと売ってないから大変だー、って言っていたよ。」
「去年の一年間で突然大きくなったから大変だったんだよ、服が追いつかなくて・・・。」
「ボクも大きくなるかな？ボクちんちくりんだから・・・。」
「大丈夫だよ、私も小さい方だったからボク君もその内伸びると思うよ。」
「そっかあ、じゃあ次にここへ来た時どっちが大きくなってるか勝負

だね♪」ぼくはもう一度種をぷっ！と飛ばす。
「・・・私はこれ以上伸びて欲しくないんだけど。」複雑な気持ちでスイカを一口食べるのであった。
「二人ともー。」おばちゃんから声をかけられて振り返る二人、その瞬間フラッシュが焚かれる。
「いい写真がとれたわよ、夏休みの終わりにまとめてプリントするからね。」
「もー、おかあさん。突然は無しだよ。」
「ふふっ、いいじゃない。蛍ちゃんもかわいくとれてるわよ♪」デジタルカメラの中に収められた写真は楽しそうにスイカを食べる二人であった。
「明日は朝早いんでしょ、そろそろお休みしたら？」
「はーい、ボク君もお休みしよう。」
「うん。おばちゃん、蛍お姉ちゃん、おやすみなさい。」

8月3日　晴れ
蛍お姉ちゃんとスイカの種を飛ばしあった。
次にここへ来た時にはぼくの方が大きくなってるかな？

８月４日の朝

「二人とも、忘れ物はない？」おばちゃんが玄関口で二人に呼びかける。

ぼくと蛍は準備万端とばかりに・・・

「はーい！いっぱい持ったよ！」元気よく返すと玄関を出る。

日課のラジオ体操の時間より早く起きたくらい楽しみな海！今から何をするか楽しみにしつつテンションを上げてラジオ体操を終えると越谷家へと向かう。無人野菜売り場にて買い物をするように夏海に受けたが、それは一体なんだろう・・・と思いながら向かう。

「蛍お姉ちゃん！きっとこれだよ・・・。」ぼくは畑の横にある小さな屋根付きの棚に沢山の野菜が置いてる一角を見つける。

袋に数個に分けられた野菜が入っており、全て１００円というとんでもない安さであった。

「本当に無人で販売してるんだね・・・。」

「そんな訳無いよ、きっと監視カメラが置いて・・・ない！じゃあ、この賽銭箱みたいな物は・・・取り外せる！・・・こんな防犯でどうやって商売が成り立つの!!」ぼくはとんでもなく取り乱した。

「ボク君、私も信じられないんだけど・・・。この辺りの人の家は出かける時でも鍵をかける事なんてないらしいんだ・・・。」

「えっ！」ぼくは蛍の話を何かの怪談のように感じて振り返った。

「それどころか、夏海先輩は家の鍵すら見たことないって言ってたよ。」もはや恐怖すら覚え、寒気が走る・・・。

「がーん！近隣ではゴミ出しのタイミングを見て泥棒が入るから、一瞬でも家から離れる時は鍵をかけるようにって教えられてきたよ・・・。」

「ボク君、それはまた極端な環境だね・・・。」蛍は驚きつつ、頼まれた野菜を集めてお金を入れた。

「・・・・・・ありえないよ。」ぼくは頭の中で先ほどの蛍の話が信じられずまだ混乱の最中にいた。

「パソコンにはウイルスソフト、携帯電話には自動ロックに指紋認証、

家の鍵はディンプルキー二箇所だと当然のように思っていたけど、田舎はぼくの予想をはるか上を超えてくる・・・。」
「ボク君が壊れちゃった・・・、ボク君！しっかり!!」蛍はなんとかぼくの手を引いて歩いてくれていたが、突然手のかかるポンコツと化した弟に涙が出そうになる。
「にゃんぱすー。」れんげとほのかが同じ越谷家に向かうので合流する形となる、いつもの謎の挨拶がかかる。
「あっ！れんちゃん!!お願い、ボク君を助けてあげてー。」
「どうたんほたるん、ボク君がどうなったですか？」
「無人販売所を見て、ショックを受けちゃったのー！」
「ありえない・・・。お金はレジに・・・、レジのお金はすぐに警備会社が・・・。」
「おーい！ボク君どうしたんですのん？」
「あっ！れんげちゃん!!無人販売が野菜で、売ってるお金が！」
「・・・・・取り敢えずボク君は疲れてるんな、コマちゃんの家で今日は休んでおくんな。」
「えっ！」ぼくは我に還える、れんげの吸い込まれるような瞳を見ていると段々と頭が冷静になっていった。
「これをみるんな？」れんげは突然ポケットに入っていた毛糸を手で引っ張り出してあやとりをする。
「これはウチが考えた宇宙なん！この中心をよく見れば、ボク君の考えることなんてちっぽけな宇宙の一部にしかすぎないんな!!」
「・・・・・たしかに、この広い宇宙にはそれくらいの違いがあっても大したことないかも。ボク、何難しいこと考えてたんだろ？」
「・・・・・海に行くんな、海に行けば全てを包んで流してくれるん。」
「うん！・・・難しいことは忘れて海に行こう!!」ガッツポーズを取ったボクは元のテンションに戻り、元気を取り戻した。
「れんちゃん、ある意味すごい・・・。」蛍は落ち着いたが、その意味のわからない一種の催眠じみた誘導に驚きを隠せないでいた、それはほのかちゃんも同様で呆然としていたのだった。

「いただきまーす!!」越谷家についた一同は早速渡した野菜を使って朝ご飯が出来上がる。
　ラジオ体操でお腹を空かせた子供達は一斉に朝の和食コースを食べ始めた。
「雪子おばちゃん、お味噌汁にトマトがはいってるよ!」ボクは味噌汁に浮かぶトマトをみて驚く。
「本当だ、トマトが入ってる。」ほのかちゃんもお箸で摘んで目を丸くした。
「あら?都会のお味噌汁には入ってないのかい?」雪子さんはさらっと返して
「まあ食べてみなよ、ナスと同じくらいメジャーな逸品だから。」夏海が促した。
　蛍とぼくとほのかが一斉に食べるとその酸味と味噌汁の塩気が微妙なマッチで夏の味噌汁として完成されていた。
「やっぱり・・・、うちの住んでいるここは田舎なん?」れんげは一学期の時に投げかけられた事案を繰り返す、外の世界を知らない彼女ならではの質問であった。
「だから、それはないって。夏海ちゃんの住むここが田舎なわけないじゃん!」全く回答にならない答えにれんげの心に全く響いてなかった。
「だって、みんな車は最低一台は持ってるし!」
「都会は公共機関が行き届いてるから必要がないときくのん。」
「アスファルトの道は高速道路だし!」
「信号をつける必要がないから早く着くだけのん、それに都会には砂地の道路なんかないとひかねえが言ってたのん。」
「・・・・・・。」夏海は完全に言い負かされていた、というかここまで結論出ているのにれんげはここを田舎と断定してないのはどういう事だろう・・・。
「ここはたしかに都会ではないけど、都会にはないものだらけで新鮮だよ。」ぼくはれんげちゃんにいう。
「どういうことなん?都会はいい所だとひかねえは常々いってるの

ん。」
「ここに比べたら物が溢れて人が多いけどそれだけだよ。それよりも、ここには東京にはない無人野菜販売もあるし、泳げる川もあるし、虫相撲をする虫も探せば手に入る。東京なんて買わないと手に入らないんだから。」
「なんと!虫を買わないと手に入らないとは・・・、ウチの常識が壊れていきそうなん・・・。」
「ぼくもそうだよ、さっきの無人の野菜販売にはびっくりしたんだから。」都会には都会の、田舎には田舎のいい所がある。その答えにれんげは満足したようだった。
「さあさあ、ご飯食べたら早く支度しな!そろそろ一穂ちゃんが迎えにくるんよ!」雪子おばさんがお開きといった感じでぱんぱんと手を叩く。
「あれ、にいちゃんは?」
「何言ってんだい?とっくに食べて部屋に戻って準備しているよ。」
「はやっ!あたしも準備しないと!」夏海は残りを口にかきいれて部屋に戻るのだった。
「なんで二人とも直前まで準備しないのかな・・・。あ!お母さん、私の水着は?」小鞠は思い出したように母に聞く。
「あんたは身長伸びなかったから去年と同じでいいでしょ?」
「え!だってそれは・・・。」雪子は片付けで忙しく、小鞠をそのまま放置した。
　それは小鞠にとって楽しい海から転落する事を意味していた、ここから彼女の不幸が始まろうとしている・・・。
「あたし海なんて行ったことないから楽しみだよー。」ほのかちゃんが嬉しそうにぼくに言う。
「東京には泳げる海なんてないからね、ぼくも楽しみなんだ!」
「ふっふーん♪ここには砂浜がたくさんあるのん、ボク君には改良型の水鉄砲をお見舞いするんな!」
　あたりの浮かれた言葉を聞きながら小鞠は深海へと沈んでいった・・・。

８月４日　海水浴！そのいち♪

駅から電車に乗り主要駅で一度乗り換えて数駅に目的の海水浴までやってきた一行は、着くなり一番に着替えた・・・。のではなく服の中にすでに赤いビキニの水着を着ていた夏海と、椰子の木が描かれた海パンをズボンの下に履いていたぼくが海にダイブする。
「うっひょー、冷たくて気持ちいいな！ボク君!!」クロールで軽く流す夏海に平泳ぎするぼく。沖にゆっくり進むと波が顔を直撃する。
「しょっぱ！海の水は塩っ辛いけど、よく浮くね！」
「はっはっは！ではボク君、早速潜水勝負いってみるか!!」夏海はその場に止まり勝負をふっかける。
「ジェットサイダーの王冠あれから１６個も見つけたよ、もう夏海お姉ちゃんに負けないくらい沈んでられるよ。」ぼくは気合いを入れる。
「・・・あ、うん。そうなってるといいな・・・。」
（ボク君信じているんだー、ジェットサイダーの王冠を集めると泳ぎが上手くなる話・・・。）
「うん！じゃあ行くよ！夏海お姉ちゃん!!」二人のテンションはマックスであった。
「あーあー、準備体操もしてないのに・・・。って、まああの二人は一番必要ないかもしれないけどね。」一穂はパラソルを設置すると、みんなの荷物を運び込んでクーラーボックスからジュースを取り出す。
「そうだよ、あの二人ずっと走り回ってたから。」一穂の手伝いをしながら一緒に座る。
「あれ？泳がないのー？」
「水着・・・、忘れました。」
「・・・・・・・・・。」
「じゃあ、ぼくが買ってあげるよ！」ひょっこりでてきたぼく君に驚く。
「な、いきなり・・・。何！」小鞠は驚いて慄く、するとぼくは小鞠に耳打ちする。
（お母さんが、水着買ってくれなかったんでしょ？だからはいっ！）

ぼくは自分の財布を小鞠の手に渡すと、クーラーボックスから炭酸飲料を片手に一気に飲む。
「あーあ、ボク君にまけたー。まさか本当にジェットサイダーの王冠には効力あるのかなー。」同じくクーラーボックスからキュウリを取り出すとかじり出した。
「い、い、い、一万円!!」小鞠は驚く、ぼくのキャラクター入りのビニール財布にそぐわない一万円札が入っていた。
「えらいお大尽だな、ボク君のあの姿は世を忍ぶ姿でＩＴ企業の社長か！」夏海は齧りながら小鞠を焚きつける。
「お待たせしましたー、みんなの水着着替え手伝いましたら遅くなりました。」水色のビキニにパラオ姿の蛍に、ピンクワンピースにリボンがついたれんげ、同じく白いワンピースにピンクのフリルがついたほのかちゃんが現れる。小学生とは思えぬ着こなしの蛍にぼくの財布の話題は吹き飛んだ。
「うわあああーん!!」小鞠は財布を握りしめて走り去って行く・・・、ぼくはそれを追いかけた。
「小鞠先輩、どうされたのですか？」
「自分の胸に聞いてみなよ・・・、君は本当に小学生ですか？」一穂はさすがに驚いて聞き返した。
「ほたるん、ボク君の財布の中に一万円が入っていたんだけど、何者？」夏海の言葉に素直に答えようとしたが、ぼく君に口止めされていたのでぐっと堪えた。
「えっ、と・・・。お父さんとお母さんのお手伝いをするたびにお小遣いをもらっていたから、それが溜まったのかな？」
「こっちきてまだ４日だよ！１日で２０００円稼いだことになるよ！」
「・・・先輩、２５００円です。」
「・・・数学の宿題ふやそうかー？」蛍と一穂の返答に夏海は頭を掻きむしる。
「だー!!ウチがいいたいのはそこじゃない！どさくさに紛れて宿題増やさない!!ボク君の財布の問題だー!!」

「あー・・・。ボク君、私の家のエアコン直してくれておばあちゃんがお小遣いあげてたよ。」ほのかちゃんの一言で蛍の口封じは早くも瓦解した。
「なぬ!?ボク君エアコン直したの!」
「う、うん・・・。いろんなもの直せるみたいで、走り回ってるボク君を発見したら家に呼ぶことが静かなブームになってるよ。」
「あんびりばぼー、ふぁんたじっくボーイ!!」
「なっつん、ボク君はそんなにすごいんな?」
「れんちょん、ボク君は壊れた電化製品を直したんだよ!普通は業者さんに高い修理費を払ってお願いしないと直してくれないんだよ!」
「ボク君、５００円もらって喜んで直していたよ。」ほのかの言葉に夏海は再び驚く。
「ノー!なんてデフレを!!出張修理なんて最低一万円はするのに!!・・・これからは夏海ちゃんを通すように!」
「こりゃあ、頼まなくなるわー。」一穂はキュウリをかじって締まるのである。
「ふっふっふっー!ボク君はすごいんな!ウチはそんなボク君のお嫁さんになれるんだから将来はあんたいなんな!!」
「えー!!」一堂は驚いた。
「こりゃ、驚いた・・・。れんちょんがすでに手をつけていたとは・・・。」
「えー!どうしてれんちゃん!!なんでお嫁さんに?」蛍は混乱して聞いてみる。
「駄菓子屋でボク君と一緒にお風呂に入った時、大事な所を触ったみたいなんな、駄菓子屋に言うには他人が触ってはいけない所だったみたいだから他人でなくなればいいかと思いまして・・・。」
「こりゃあ、ぶったまげたわー。れんちゃん、ボク君と一緒に東京にいくのかい?」
「かずねえー!そこじゃない!!れんちゃんがボク君と一緒にお風呂に入った事!」
「れんちゃんから入ったからしょうがないよー。」
「なんてオープンな・・・。しかし、ボク君帰ってきたら悪事がバレて

タジタジでしょうな。」うんうん、一堂は頷いて彼の帰りを待つのである。

「小鞠お姉ちゃん、まだー?」ボクは勢いで小鞠の水着を買うのに同行する事となった。

「まってー!今着替えているから!!」ぼくはひたすら待っていた。小鞠お姉ちゃんが出てくるのを・・・、退屈だなあ。

それからさらに十分程経過し、僕は泣き言を言ってしまう。

「小鞠おねえちゃーん。」ぼくは言うと・・・。

「ぼくくーん。」

「・・・ん、なに・・・?」振り返ると三人の男性がぼくに声をかける。

「どうしたのかな?」

「お母さんとお父さんはどうしたのかな?」

「お名前わかる?」

「・・・えっ?」

「お待たせー♪ボク君は遅くなってごめんねー、・・・って、あれ?」オレンジのワンピースの水着が気に入った小鞠はポーズをとって出てくるが、見せたい相手が居なくなって呆然とする。

「どこ言ったのかな?・・・とりあえず戻ってみよう。」

・・・　　・・・　　・・・・　　・・・・

・・・・・

「ボク君がいない!!」小鞠は戻った時騒然とする。

その間に夏海とれんげは卓の顔面を砂で覆い、シュノーケルで息をしているのみ・・・、どう見ても不審者に見える。

蛍とほのかは砂崩しをして遊んでいた。

てっきりボク君は退屈になって戻ってきていると思っていた小鞠は一気に血の気が失せた・・・。

「だ、大丈夫だよ。ボク君はしっかりしてる都会っ子だから・・・、そうだ！キッズ携帯持っていたから・・・。」蛍はおろおろしながら提案するも・・・。
「これのことかいー。」一穂はぼくの荷物の一つから拾い上げる・・・。
「ボク君ー!!」蛍はもう涙目になって叫ぶ。
「みんなー。冷静に・・・、ボク君は私の生徒ではないから、責任は私だけにあるわけではなくて・・・。たからね、監督責任は・・・。」一堂は絶望する、なぜこの人を保護者として引率したのだろうか・・・。
一斉に各自走り出す、消えたぼく君の行方は一体・・・。

８月４日　海水浴！そのにっ♪

「ボク君ー!!」
「ボク君ー!!」
「お願い！返事をしてようー。」蛍はすでに精神崩壊したのか、自動販売機の取り出し口に手を突っ込みながらいるはずのないぼくを叫び続ける。
「お、落ち着くのん！ボク君はきっと・・・、どこかで呼び止められて・・・。」
「誘拐されたの！」蛍の想像力が脳裏で働かされていた。
「どっかで修理をしてるのん！だからクーラーとか、扇風機のあるあたりで待ち伏せすればきっとでてくるのん！」
「・・・れんげちゃん、それはちょっと。」ほのかちゃんがフォローのつもりで無理があると告げる。
「わたしのせいだ・・・。」ポロポロとなく小鞠にみんなが注目する。
「わたしが着替えで遅かったから、ボク君は・・・。」その涙に誰もが一瞬口を閉ざしてしまう。
「・・・先輩、大丈夫です。ボク君はすごく強い子で、私以前に迷子になった時もボク君に二度も救われているんです。だからきっと大丈夫です。」
「ほたるうー。」小鞠は蛍に抱きついて慰め合う。

ピンポンパンポンー♪
「えー、迷子のお知らせを致します。
東京からお母さんが出産を迎え、帰郷しております名前不詳の・・・。」
「ぼくはボクだってばー!!」
「ボク君を預かっております、覚えのある方は迷子センターへお越しください。」

・・・　・・・　・・・・・　・・・・・

・・・・・・

「ごめんなさい、迷子センターがぼくを迷子だって決めつけるから・・・。」ぼくはバツが悪くてとりあえず一堂へ謝罪する。
「まあまあ、無事で何よりだよー。もう小鞠ちゃんと蛍ちゃんが泣いて泣いて・・・。」
「あー!!それは言わない約束でしょ!!」小鞠はすぐ様横槍を入れた。
「まあまあ、ボク君が無事に見つかったし・・・。そろそろご飯にしようかねー。」
「おー!かずねえ!!お弁当は持ってこなかったけど、今回はどうするの?」
「ふっふーん♪今回はすぺしゃるなイベントを準備しているのだよ。」一穂は何か策があると見て、意味深な一言を告げる。
「なになに?楽しみだなあー。」ぼくははしゃいでいると、一人の女の子が背後から肩をとんとん、とする。
「あれ?・・・・・・みどりちゃん?」
「やっぱりあんただったんだ。」ぼくがみどりちゃんと呼んだ女の子は水玉のワンピースを着て仁王立ちでぼくの前に立ちふさがった。
　長いロングの黒髪で肌がれんげく並みに白く、僕よりも背の高い女の子だった。
「さっきの放送で、もしかして・・・。と思ったけど、こんなとこで何してるのさ?」
　二人のやりとりに、みんなが不思議な顔をする・・・。
　ぼくはもちろんこの地の人間でないのに、なぜ知り合いがいる?といった感じであった。
「みどりちゃんこそ・・・、北海道にいるはずのみどりちゃんがどうして?」
「お母さんがこの夏休み中に出産があるから、親戚の家に厄介になってるんだわ。」
「みどりちゃんも?うちもだよ。」
「あのー。ボク君?この子と知り合い?」蛍が控えめに話を切り出し

た。
「この子はみどりちゃん。蛍お姉ちゃんがお母さんのお姉ちゃんの子供で、みどりちゃんはお父さんの弟の子供だよ。」
「ボク君の親戚なんだ。」
「あっ！吉本みどりです。ボク君の従兄弟で、普段は北海道に住んでます。」
「北海道！どうりで肌が綺麗なわけだね。また私よりも背が高い・・・。」小鞠が突っ込んだ。
「にゃんぱすー♪」
「みどりお姉さん、こんにちは。」れんげとほのかがそれぞれの挨拶する。
「にゃんぱす？ここの挨拶？」みどりが不思議な顔をする。
「そうなん！」
「そうなんだ。・・・にゃんぱすー♪」みどりは精一杯似せるように返しれんげは満足し、ほのかとも丁寧に挨拶を交わす。
「あんた、今回こっちが出産だからお母さん側の親戚に預けられたんだ。私も一緒だけど・・・。」
「そうだね、吉本のおばちゃんも子供が生まれるんだ。」
「うん。」
「まあまあ、積もる話もあるだろけど。・・・みどりちゃんだっけ？よかったらご飯、一緒に食べるかい？」一穂がみどりに提案し、みどりは付いてくることになった。
「みどりちゃん、私蛍って言います。遠いけど私たちも親戚になるんだね、よろしくね。」
「みどりです、よろしくお願いします。」二人は会釈する。
「みどりちゃんはぼくと同じ三年生だよ。」
「そうなんだー。私は五年生、よろしくね。」
「ご、五年生！私も背は高い方と言われるけど、蛍さんの方が全然高い・・・。」
「え？でも私三年生の時はみどりちゃんより低かったよ。きっとみどりちゃんの方がおっきくなれるよ。」

「ありがとうございます。」二人のなんだかぎこちない挨拶を終えた頃、目的の場所に到着する。

「いらっしゃいませー。」
「こちらへどうぞー。」
「ひかねえ・・・、なにやってるん？」
「このみちゃん、どうしてここに？」れんげと小鞠の言葉に二人は気まずそうに下を向く。
　よく見ると奥にある食事処には駄菓子屋の名前と同じで「かがや」を掲げていた。
「なにって・・・、バイトだよ。駄菓子屋が海の定食をするからって、そそのかされたらこのザマだよ！」
「あはははは・・・、この格好はちょっと恥ずかしいね。」このみがいうように、今時のファミレスでも採用しないようなミニスカート風の制服で場合によっては水着よりも恥ずかしいかもしれない・・・。
「おーい、バイト共。無駄話してたら時給下げるぞ、キビキビ働けー。」
「あんの悪魔めー！」ひかげは戻って注文の品を届けに走り、このみはぼく達一堂を先導し予約席へと着席させる。
　注文を一通り受けたこのみは笑顔を向けて退席していった。
　楓の作る屋台メシはなかなかの評判で上場の売り上げであった。
　なにせ、ウエイトレスとコックの見た目もあり鼻を伸ばした男どもがわんさかとやって来ている、そして料理の味もなかなかであるのだからリピーターがあるのだろう・・・。ある意味楓の戦略勝ちであった。
「しっかし蛍といい、みどりちゃんといい、ボク君の親戚の女の子はどうなってるんだ。」夏海が切り出す。
「そだちすぎでしょー、君達・・・。」一穂も夏海と同意見であった。
「そう言われたって、何もしてないだべさ。」
「う、うん・・・。私も、特に・・・。」二人の言葉に小鞠はがっかりする、成長の極意があるのかと思っていただけに・・・。
　でもみどりも蛍も食べる量は意外と多い、育ち盛りの夏海と張るく

らいであるのだからやはり食事だろう・・・。
「みどりちゃん、親戚の家ってこの辺り？ほく達は電車で結構来たんだけど。」
「私もよ、電車にのってここまできたんだわ。」帰りの切符を見せると一穂は頷く。
「隣町だねー。バスで学校から四駅、電車で一駅。」
「そうなんだ！じゃあみどりちゃんもよかったから遊びにこない？」
「いいよ、じゃあ何かあったら連絡して！遊びに行くから。」みどりは携帯の番号を渡すとぼくはキッズ携帯に登録してお互い確認する。
「でも！二人だけは無しだからね、デートになっちゃうから！」
「うん！わかったよ。」
「私そろそろ行かないと、ご飯ご馳走になりました。」みどりはたちあがっておじきをする。
「お金はいいよ、うちにも遊びにおいでー。」
「ありがとうございます、したっけばいびー。」みどりは元気に走り出していった。

８月４日　海水浴！そのさんっ♪

お昼を食べ終わり、一堂はパラソルの設置した場所に戻ると騒然としていた。
「離れて下さい！」ライフセーバーの方々が何やら土に埋もれているものに対して群がっていた。
「あ・・・！」
「にいちゃん・・・。」越谷姉妹が絶句する。
顔面を土に埋められシュノーケルで呼吸をする変態、いや物体に通報を受けたのだろう・・・。

・・・　・・・　・・・・　・・・・
・・・・・

「午前中は色々あったけど、ようやくみんな揃ったな！なにして遊ぶ!!」夏海が切り出す。
「はいっ！はいっ！のん。」
「おっ！れんちょん、いい意見があるのかな？」
「うち、中当てやりたいん！今中当てが熱いんな!!」どこからかボールを取り出すと瞳に炎が宿っていた。
「さすがれんちょん・・・、どこに行ってもあなたのすたんだーどには感心するよ。」夏海のツッコミにほのかすら軽く頷いた。
「れんちゃん、せっかくの海なんだから新しい遊びにしない？」蛍が切り出す。
「じゃあ！ビーチ中当てなん!!」れんげはとことん中当てにこだわるそうだった。
「ビーチ中当て！ぼくやった事ないよ！なにそれ!!」
「まさかの反応あった!!」小鞠が驚いてぼく君を見る。
「さすがぼく君な・・・、うちが見込んだだけはあるのん。
このビーチ中当ては、ただの中当てとは違うんな・・・。」
「おっ！れんちょん何か秘策があると見た！聞いてみよう。」
「このビーチ中当ては一見普通の中当てのように思えるが、舞台は

海・・・。海でするのん!!」
「海で!これはまた難易度が高い!!」夏海が叫ぶ。
「砂浜でしないんだ・・・。」そして蛍の鋭いツッコミが入る。
「うんうん!それで?」ぼくはその先を聴きたくなって話を促す。
「ボール以外にも水鉄砲で妨害ありのデストロイなのん!」
「・・・つまり、中当てしながら水鉄砲で妨害しながら中にちょっかい出していいって事?」
「それだけではないなん!外の人間同士で外野の支援を邪魔しあう事も可能なん!」
「面白そう!やってみようよ。」
「中当てよりも、水鉄砲合戦になりそうだな・・・。」ぼく君の意見とは裏腹に夏海は展開を予想する、そしてカバンより取り出すはポンプ式の水鉄砲であった。
「え?でもそんな、水鉄砲なんて持ってないよ。」
「あ、私もだ・・・。」蛍と小鞠は無装備
「のん!」れんげちゃんは夏海と同じくポンプ式の水鉄砲に、ほのかちゃんはハンドガンタイプを取り出し
「ぼくもあるよ!」ぼくも同じくハンドガンタイプを
「・・・・・・。」そして卓もまたハンドガンの水鉄砲を取り出した。
「みんな何を予想したの!」小鞠は驚いて突っ込む。
「じゃあ蛍と姉ちゃんは別れて、ぼく君が蛍と、ねえちゃんとにいちゃんがコンビね!」
「外野は、にいちゃん側にれんちょんとほのかちゃん。ウチが蛍側でバランスいいかな?」獲物と年齢的に分けたのだが異存はなかった。
　早速海へ入り、膝くらいまでの深さの所で大まかに区分けをすると各々水鉄砲を満タンにして始められた。
　じゃんけんで先攻を決めると蛍が勝ち取り、ボールは蛍チームになる。
「えいっ!」蛍は卓に向かって攻撃するが正面からのボールなどとりそこねはない、卓は簡単に受けようとするが眼鏡の奥の眼球が側面を捉える。

「・・・・・・!」卓は突然横へ飛んで逃げる。それはボールではなく夏海のすべての水を使った高圧放水であった、ボールは外野へと外れ夏海はキャッチする。
「ちっ!」凶悪な顔をした夏海が舌打ちすると、再び内野へとボールを戻した。
「オーライ・・・。」ぼく君はそのボールを受け取ろうとすると、ほのかちゃんの水鉄砲がぼくの目を直撃する。
「目が、目があ!!」ぼくは大事な場面で突然ダメキャラになるように目をこすりながら右往左往する。
　その間にボールはれんげの手元に移る。
「ほのかちん、ナイスなん!!」そのまま目を潰されたぼくにれんげは追撃の一撃を放とうとするが、蛍がぼくへの攻撃を代わりに受け止める。
「ほたるー!ナイスアシスト!!」夏海が外野より声援を送る。
　蛍はそのまま外野の夏海にパスを送ると、夏海は受け取る少し前に卓に水鉄砲を見舞う。
「・・・・・・!」流石に油断した卓はその水圧の強い水鉄砲に面を喰らい、ボールを受け取った夏海は速攻する。
「えっ?」しかしそれは卓への攻撃ではなく、卓を封殺した上で小鞠への攻撃だった。小鞠はその不意の一撃を受けて直撃し倒れこむ。
　バッシャーン!!
「小鞠先輩!!」蛍は心配になり声を上げる。
　小鞠はゆっくりと立ち上がり水がはいった耳を頭を傾けて出す仕草をする。
「油断したー。今のはお兄ちゃんのアシストをなくした攻撃だったのか~。」
「なっつみちゃんの頭脳プレイだよーん♪」ガッツポーズをして浮かれる夏海をよそに小鞠はかなり悔しそうであった。
「うわあ、夏海に言われると余計に腹がたつなぁー。」トボトボと外野へと引っ込んで行く。
「・・・・・・。」卓は外野のほのかへとパスを送る。

「えっ・・・と、はいっ！」卓が再度こちらへと手を上げているのでほのかは素直にボールを送る。
　蛍とぼくに警戒を前後へと振り分けるが、こちらも水鉄砲で卓の顔面を狙うが頭につけていたゴーグルを装着していた、目潰しは効かない。すぐさまぼくに狙いをつけて攻撃を放つ。
「うわっ!!」その早いボールをなんとかかわして外野へと流れたが、誰もいない水中からシュノーケル姿のれんげが飛び出してボールをキャッチする。
「ボク君覚悟なんー!!」卓かられんげの連続攻撃にぼくの腹部に命中する、ぼく君も水の中に沈んでいった。
「あーあ！やられちゃった。」ぼくは悔しそうに外野へと移る。
「ふっふーん♪ほのかちんとにいにいでパスを行えばウチへの警戒が緩むと思ってたなん、その隙をついて水中で待ってたんな・・・。」
「なんと・・・、あちらにも知将がいたとは・・・。」夏海が悔しそうにつぶやいた。
「ほたるー！チャンスだ、こちらの攻撃で終わらせるよ！」夏海はボールの主導権を握った蛍に指示を送る。
「う、うん！」外野のぼくはボールを渡すと卓へ攻撃態勢をとるが、外野の夏海に早いパス回しをする。
　足場は水の上に砂地、早くボールから逃げられる訳ではないのですぐに距離を不利な体制に持っていける。夏海→蛍→夏海→ぼく→夏海に渡った時、夏海と卓は至近距離になっていた。
「にいちゃん！覚悟!!」夏海渾身の攻撃だが、卓は見事にキャッチした。
「・・・・・・。」ゴーグルの奥の瞳がキラン、と光る。
「あれを止めるか・・・、蛍!!」
「きゃあー。」蛍に目をやると、れんげとほのかちゃんの一斉掃射で蛍は陥落していた。
　水鉄砲の細い水を蛍の脇腹を狙いくすぐり攻撃、そしてれんげの水圧の強いタンク式水鉄砲でよろけていた。
「・・・・・・。」卓はその場から山なりにボールを投げて、蛍の頭に

ボスンと当てると内野二人アウトになりゲームは終了した。
「あちゃあー。」
「やったのんー!」
「れんげちゃん、やったー!!」夏海を余所にれんげとほのかはハイタッチをして勝利を称えあっていた。
「れんげちゃん、ビーチ中当て面白かったよ!」ぼくはれんげにそう伝えると再びふっふっーん、の顔になったのであった。

８月４日　海水浴!・そのよんっ♪

すっかり陽も傾いて西日になろうとしていた時、ぼく君と蛍は着替えを終えて人が少なくなった砂浜を歩いていた。帰り支度を始めた時、資源ごみなどは自治体の回収があるらしく、そこへゴミを持ち込んで少しでも持って帰る量を減らそうとしたのである。それ以外のゴミは出張のかがやにお願いして便乗する事が出来たので随分楽になった。

ザザーン・・・。

波打ち際を歩く蛍とぼくはその音に耳を傾けていた。

「昼の砂浜も活気があってよかったけど、夕方の砂浜は落ち着いた感じがするね・・・。」

「落ち着いた、というより寂しく感じるよ。」ぼく君の答えに蛍は口を尖らせた。

「ぼく君はもう少し女の子の気持ちを汲み取らないと、れんちゃんに嫌われちゃうよ。」

「え!・なんでそこでれんげちゃんが・・・。」ぼくは驚いて振り向く。

「え?・あ、そっか!・ぼく君が行方不明事件があったから有耶無耶になったけど、じつは・・・。」ぼくがいない間にあった出来事を伝えるとどんどんと表情が暗くなっていく・・・。

「夕方の砂浜・・・、落ち着いていいなあ。」ぼくは口ずさんでいた、現実逃避で自分の世界へと逃げているのである。

「ぼく君がまた壊れたー。・・・・・・よしっ!!」蛍は頬っぺたを両手で叩いて気合を入れる。

「ボク君ー。」蛍の呼びかけに、ボクは虚ろな表情のまま振り向くとロングの髪を両手でサイドに持ち

「ウチ、ザリガニとか好きなん・・・。」蛍のモノマネにボクは冷静になる。

「れんげちゃんはきっとサワガニが好きだと思うよ・・・。」

「そ!・そうだよね、ザリガニはダメだよね!!」

「ダメじゃあないと思うけど・・・。」二人はにらめっこのように見つ

め合うと不思議と笑いが噴き出した。
「ボク君、れんちゃんの真似うまいねー。」
「蛍お姉ちゃんはベタすぎるよー。」
二人はなんだが楽しい気分になり、手を繋いでみんなの待っている場所に戻る。
波打ち際の砂浜で、時折足にかかる海水が心地よかった。
「あーるーぷーすーいちまんじゃーく、こやりのうーえーでアルペン踊りをさあ踊りましょ♪」
「らーんら、らんらんらんらんらん、らーんら、らんらんらんらんらんらん・・・。」
二人の楽しげな歌に帰り支度する人々を和ませた、側から見れば仲のいい姉弟のようにみえたであろう。
「ちょっとー。お嬢ちゃん達、いいですか?」突然呼び止められて二人は浜の方は向くと突然のフラッシュが焚かれた。
「え!・・・何?」蛍は呆然とすると、そこには1人の外国人がカメラを片手に手を振っていた。
「突然でごめんなさい、私は世界中の夕日を撮ることがすきなフォトグラファーです。この美しい夕日と君達がマッチしていたのでつい写真を撮ってしまいました。」名刺を渡されて、自己紹介される。
「へー、それで金髪のおじちゃん。写真はくれるの?」
「もちろんでーす。でも私ここで数日過ごしたら富海に帰らなければなりません、よかったらメールアドレスか送り先があれば送りますよ。」
「やったあ!じゃあボクの住所とメールアドレスっと!」キッズ携帯に登録していた情報を紙にかいた外国人は笑顔で答える。
「心の広い坊や、ありがとねー。近々送るから、楽しみにまっててよ。」手を振って外国人を見送った。
「・・・警戒の強いボク君がよく住所を教えたね。」
「え?だってあの人はいい人だよ、どうして?」ぼくの目は常に輝いていた。親から言われた事を純粋に信じ、自分の目で見た物を信じる。その追求がぼく君の原動力なのだろうと蛍は思い、納得する。

「なーんでもないよ、さあ帰りましょう。」
「・・・へんなお姉ちゃん。」頭を傾げて蛍の後ろを追っていくのであった。

帰りの電車では疲れ果てた一向は終点の乗り換えまで寝てしまい、電車連絡の待ち時間でお腹がすいてきたので駅中のうどん屋さんに目星をつける。
「いやあ、都会になるとお店があるから助かるなー。」
「次で最後ので電車だから遅れても知らないよー。」一穂の忠告が背後から飛んできた。
「・・・結構田舎なような・・・。」夏海の一言に蛍は小さく突っ込む。駅の外を見ても街灯は少なく、夏みかんの畑が見える・・・。ぼくも同様の意見であったので頷いた。
そんな2人の疑問を他所に根っからの田舎暮らしの方々は気にすることもなく、反対方向の駅にあるうどん屋さんへと足を踏み入れた。
「いらっしゃい!!」お店の人に誘導され、一角へと案内されるとぼくとれんげとほのかちゃんが立ち食いするには身長が足りないそうで椅子を三脚渡された。
「椅子は三脚で大丈夫ですか?」その言葉に小鞠は反応する。
彼女は相当気にしたらしく、うどんが出されてもまだ蛍とその話から逸れなかった。
その間、夏海は唐辛子の蓋が外れて一瓶分をぶちまける。吹き出す汗、そして視線で隣の姉のうどんに狙いをつける・・・。
唐辛子が山盛りになった油揚げをひっくり返そうとした時
「夏海お姉ちゃん!それはロシアンルーレットだね!!いつもお姉ちゃんは遊び心があって面白いよ。」
「びくっ!!」ぼくの言葉に一斉に夏海のいたずらを看破された。
小鞠は自分のうどんを死守して守る。
「夏海、今何を企んでた!」
「にゃはははは・・・、瓶の蓋が取れた・・・。」涙目になると、その騒

動を受けた店主が出てくる。
「お客さん、すみませんねえ。せっかくのうどんをだめにしちゃって・・・。今すぐ取り替えますので少々お待ちを！」そして出し直されたうどんにはエビが一尾乗っていた。
「なっつみちゃんラッキー♪ぼく君！ナイス!!明日海の潜水に負けた分もあるから秘密を一つ教えよう!!」
「明日だね！やったー！」ぼくは大喜びではしゃいだのだった。

「先輩！電車来ました!!」そこそこお腹が満たされた頃に蛍の警告が飛んだ。
　元のホームから警笛をあげながらホームに滑り込む電車の陰に急ぎ出す。即座に反応した蛍は小鞠を抱え、夏海がれんげを背負う。
「ほのかちゃん！寝ちゃだめだよ！」ぼくは揺らして起こすが彼女はお腹が満たされて再び熟睡に入り出した。
「えへへー、海楽しかったなあ・・・。」
「だめだこりゃ。」ぼくは諦めて彼女を背負うと走り出す。
　階段を駆け上がり、反対ホームに着くとぼくとほのかちゃんの荷物はすでに車内に運びこまれているのでそのまま滑り込んだ。
「セーフ・・・。」震える足に喝を入れながら走りきったのでその場で崩れそうになるが、ほのかちゃんを座席に置いてなんとか横に座る。
「ぼく君頑張ったね！君ならできると思ったよ。」夏海が褒めちぎる。
「絶対、ほのかちゃんを忘れていたでしょ・・・。」
「まあまあ、無事みんな乗れたんだから言いっこなしで・・・。」
「お兄ちゃん、いつの間に・・・。」小鞠が絶句する、あの短時間で全員分の荷物まで車内に運び込まれていたのだ。余裕な顔をして音楽を聞いていた。
「ねえねえは？」れんげの一言でみんなはハッとして、外を覗くと夜風に当てられて気持ちよさそうに眠る一穂の姿が見えた・・・。
「れんちょん・・・、ドンマイ。」
「・・・ウチ、どんまいなん！」
　一行は家に帰るなり、親に救援を求めるのであった。

・・・・　　・・・・　　・・・・・　　・・・・・・

「あら?･もうねちゃったの?･」蛍とぼくは帰るなり疲れ果てて寝てしまい、2人はリビングで仲良く寝てしまっていた。おばちゃんは2人の寝姿にくすっと笑いながらタオルケットをかける。

「今日で2人とも姉弟になったみたい・・・。お風呂入ってないけど、明日にしてあげましょう・・・、おやすみ♪」おばちゃんは電気を消すとリビングを後にする。

翌日の朝、蛍は一番から混乱するのは言うまでもない話である。

８月〇日　閲覧注意！絵日記の最終ページ

意外と謎なぼく君を解析しましたが、今後に影響するネタバレも含まれてますのでかなり下に設置しました。

見たくない方はスルーして下さい。

ボク　　９歳　　小学三年生　　姿のイメージとしてぼくなつ３を採用

背は小さい、クラスで前から三番目くらい。

９歳の中でもかなりの童顔。

性格はひょうきん、精神攻撃に弱くてすぐポンコツになる。

好奇心旺盛、なんにでもすぐ首を突っ込むのがたまに傷・・・。

子供らしいが、得意分野になると大人びる。

得意科目は理数系、苦手科目は社会。

かなりの機械オタクの上に家電オタク、さらにパソコン組み立てと修理が得意。

今後のためにと博士よりＯＲＡＣＬＥ、ＪＡＶＡを教わっているがなかなか進んでいない様子・・・。

ネットに聡く、ウイルス感染の駆除やセキュリティ対策も施せる。

近所に住んでいる博士と呼ばれる人を師事している。

絵も得意で表彰を受けてます。

実は博士・・・。かなり有名な科学者で、反物質の安定精製の確立と保存方法として研究の第一人者。あまりの秘匿内容で各国のスパイや暗殺などを恐れた博士は、秘密裏に国へ特許を売り飛ばし、そのお金で悠々自適な開発ライフを過ごしている。合間に科学や技術などに興味を持った子供に、習得する楽しさを得て欲しいと考えて門を

開いている。その中でもぼく君はお気に入りの1人で、かなりの有望株と捉えている。博士の夢はこの技術のさらに先へと進めてくれる人材をみつける事、もしくは育てる事。
ですが、ぼく君にかかれば近所に住む変な発明ばかりしてるおじちゃん扱い・・・。
元ネタとしては某漫画、アニメの阿○博士がイメージです。

※反物質とは、核から構成される電子が逆転して構成される物質の事で、現在では核レベルの膨大なエネルギーを使ってようやく極少量を作り出せるが、能率が悪い上に通常の物質と反応してエネルギーとなり消滅するので保存ができない。
もし能率よく作り出し、保存することができれば、消滅時のエネルギーは純粋なエネルギーを取り出す事ができるので非常に小スペースで高出力な燃料として使用できるとされている。
物質として解明されれば宇宙開闢のきっかけや、他の宇宙の存在も確認できるかもと言われる眉唾ものの一つ。
あくまでご参考程度に・・・、私の認識もずれている可能性がありますので・・・。SFやアニメなどでよく出てくるワードでもあります。

現在は三人家族、今夏中に妹が生まれる予定。
お父さんの弟がぼくなつ3の吉本のおじちゃんにあたり、お母さんの姉がのんのんびよりの一条のおばちゃんにあたる。
吉本のおじちゃんの兄弟ならぼく君の苗字は吉本ではないか？
いえいえ、吉本のおじちゃんはおばちゃんの牧場に養子にいってる設定なのでそのあたりもバッチリです！
東京に在住で防犯意識の高い地区に住んでいる様子、両親は機械に弱い為にぼく君が率先して行なっていた。
近隣住民にも人気が高く、ぼく君は経験値稼ぎも兼ねてデフレが巻き起こっても気にせずに色んな物を直して回っている。
将来の夢は科学者、博士の研究を理解できるようになって研究を引

き継げるように頑張りたいとの事・・・。
実はこの夏休みに得た経験により将来の夢や進む方向が大きく変わってしまう分岐点にいる事を理解していない・・・。

よくない結末として彼は夢の科学者になり、博士の反物質の研究を進めるが心無い人により軍事利用され、第三次世界大戦から文明崩壊までのルートがある。
逆に反物質を利用して小型宇宙船を開発し、宇宙開発に大きく貢献したルートもあり、職種としては画家となって世界を走り回るルートや小説家になるといった可能性もあったりします。
これはあくまで一例であり、彼の将来は無限に広がっています。

8月5日の朝

いつもより早く起きたぼくは昨日の絵日記を付け忘れたことに気付き、部屋で書き留める。

8月4日　晴れ

みんなと海に行った、まいごセンターにつれていかれてちょっとこまった。

北海道のみどりちゃんとあっておどろいた。身長、おいつけるかな？

さっと絵を描いてノートをしまうと、小さなノートパソコンを取り出すとメールチェック、ネットをサクッと見渡した。

「・・・ちょっと、しんどいかも？」ぼくは昨日の疲れからか、身体の重さを感じつつ、ラジオ体操に出る。

「・・・・・くくん？・・・・ボク君？どうしたんな？」れんげの声が意識の遠くなら聞こえてくるような感覚・・・。

腕振りをしながらぼーっとしているぼくをれんげは声をかけてくれた。

「昨日の疲れかな？なんかぼーっとしちゃって・・・。」

「そうなん？ウチはすぐに寝て元気いっぱいなんな！」レッツダンシングするれんげをよそにぼくの体はキレをなくしていく。

ついにラジオ体操の終わりにはその場でうずくまってしまった。

「ボク君！」蛍は額に手を当てるとすぐにわかった、疲れではなく風邪をひいてしまったようで体に熱を帯びていた。

「熱があるわ、私おぶって帰ります。」蛍はぼくを背負うと一目散に走って行った。

「ほたるん、コマちゃんを担いだりボク君を背負ったり、ぱわふるなん・・・。」れんげも驚いてみせた。

「・・・あ、あれ？ぼくどうしてここに？」目を覚ますと額には熱を下げるシートがつけられて寝かされていた。おばちゃんがそばにいて心配そうに顔を覗かせた。
「ボク君、大丈夫？ラジオ体操中に倒れたんだよ、覚えてる？」
「うん・・・、なんとなく。」額に手を当てられるとひんやりしたおばちゃんの手が気持ちよかった。
「まだ熱があるわね、さっきまで熱が高かったから座薬入れたけどなんともない？」
「なんかお尻に違和感があるや、でも大丈夫。」
「そう、お昼になったらお粥持ってくるからね。・・・そうだボク君は白粥と茶粥、どっちが好き？」
「え？お粥って茶色いのあるの？」
「やっぱりボク君も知らないんだ。おばちゃんもこっち来て知ったんだけど、あとで持って来てあげるね。」
「うん！おばちゃんありがとう。・・・おばちゃん、お願いしていい？」
「ん？なあに。」
「・・・・・・ちょっとだけ、一緒にいて。」僕はおばちゃんのスカートの裾をちょこんと持ってお願いする、おばちゃんは微笑んで頷いた。
「ボク君もまだまだ甘えたね。でも夏休みが終わったらお母さんがボク君の弟か妹が生まれるんだから、しっかりお兄ちゃんしないとね。」
「・・・うん。」ぼくはちょっぴりこの言葉に寂しさを感じつつも、おばちゃんの優しさの中眠っていった、そのとき蛍がぼくの部屋に入る。
「ボク君眠った？」
「ええ、慣れない場所ではしゃいで疲れたんでしょう。今日は家でおやすみかな？」
「夏海先輩と小鞠先輩がボク君を訪ねて来てるけど、今日は断っておくね。」
「そうね、今日一日様子見て熱が上がるようならお医者様に見てもら

いましょう。多分明日には元気になると思うから。」
「ボク君大丈夫かな？」
「大丈夫よ、小さい時の男の子は女の子より体が弱いからよく発熱があるの。蛍は覚えてないかも知れないけど、東京に住んでた時はボク君が熱を出して応援によくいったんだから。・・・こんなに大きくなって・・・。」おばちゃんはぼくの頭を愛おしそうに撫でると、懐かしく思い出していた。
「こっちにきてボク君はどう？」おばちゃんは少し涙が見えた、蛍はなぜ？と思いながら、戸惑いながら答える。
「？うん、すごく元気でみんなと遊んでるよ。まるで向日葵のようでいつの間にかみんなボク君が中心になって動いてるみたい・・・。」
「そうなんだ、ボク君は向日葵か・・・。」おばちゃんは一つ頷いた。
「さて、起きた時のお粥を作りますか。蛍は？」
「先輩達を私の部屋に通してるから戻るね。」２人はそう言って２人はそれぞれの場所に戻る、蛍の部屋では・・・。
「蛍こんな最新ゲーム持ってるのかあー、いいなあ！」夏海は部屋にあったシューティングゲームを見つけてプレイしていた、小鞠は夏海のアルバムを見つけて一ページをめくってみる。
「こ、これ・・・まだ一年前の蛍だよ！この一年で何があった!!」小鞠は蛍が劇的に伸びた身長に驚き、その秘密を探ろうとしていた。
　もう一冊のアルバムを見つけて手を伸ばすが、机の上が高くて椅子から無理に伸ばしたので倒れ込んだ。
「ねーちゃん！」夏海は振り返ると、小鞠はタンスに後頭部をぶつけていた。
「おまたせしました。」蛍が入った瞬間、タンスの中から大量の小鞠のぬいぐるみ、蛍が命名したコマぐるみが降り注いだのだった。
「こ、これ・・・。わたしのぬいぐるみ？」小鞠は拾い上げて自分そっくりのぬいぐるみに首をかしげる。
「本当だ、ねーちゃんが一杯。」夏海も一つを拾い上げる。
「あ、あの！・・・その！」いろんな言い訳を考えるが浮かばない、蛍は必死に釈明しようとしていた。

「蛍こんな特技があるんだ！私もお気に入りのぬいぐるみがあるんだけど蛍なら直せそうだね。蛍、私にも作り方教えて！」
「え？・・・いいですよ。」小鞠の役に立つだけで蛍は嬉しかった。
「えー、ウチそういうの苦手だなあ。」夏海はつまらなそうに言った。
「あんたは持ってきたゲームか、カセットでも見てなさい。」小鞠はカバンに入ったゲームやカセットテープを指差して一蹴する。
「ちぇー、せっかく今日はボク君に秘密を一個教えようと思ったのになあ。」伸びをしながら口を尖らせて愚痴った。
「でも夏海先輩、私の家にビデオデッキはないですよ。それにこのゲームソフトも古くて私の家にはないです。」
「・・・ボクの部屋にあるよ。」いつのまにか寝ていたぼくは、蛍の部屋に入って答えた。
「おおー！ボク少年!!寝ていなくて大丈夫ですかー。」夏海の言葉にぼくは目を尖らせて非難する。
「それだけ隣ではしゃいでいたら目も覚めちゃうよ・・・。
　おじちゃんが倉庫にあった古いデッキやらゲーム持ってきて直して欲しいと言われて直しておいたんだ。カセットとかゲームソフトがあるなら試しに使ってみて欲しいな。」
「りょーかーい！ではボク少年の部屋で見てみよう!!」ぼくの手を引いて全力でその場から退散するのであった。
「いやー！ボク君がいてたすかったー。ウチがあんなぬいぐるみチクチクなんで性にあわんよ。」ぼくの部屋に置いていたデッキとゲームを器用にテレビの入力端子に差し込むと、まずはビデオデッキにテープを入れて再生する。
「あっ！これ昔流行った超人シリーズ！この話ぼくまだ見てなかったんだ。」
「おっ♪ぼく君も知っていたのか、通だねー。ウチの父さんが見ていた時代なのに・・・。」
「うん！ストリーミング放送で時々やってるのみてたよ。」
「・・・なんだろう。共通の話題なのに違和感があるのは、何故だろうか・・・。」夏海はまた、ぼく君とのギャップに違和感を感じつつも、

午前中はそれぞれが趣味の時間を過ごしていくのであった。

８月５日の午前

「ん、んんん・・・ん？」ぼくはいつのまにか寝ていたようだった。
　体に重さを感じて動かそうとするがぼくの上に乗っかっている物体に阻まれてうまく動けない、徐々に息苦しくなり手足をばたつかせる。
　むにゅ♡
　なんか手に柔らかいものが触れる、すごく触り心地がよくて何度かぐっぽっ、ぐっぽっ、と繰り返した時・・・。
「んにゃー。」人の声がして引っ込めた、この声は・・・。
「夏海おねえちゃーん、苦しいよー。」
「ん、あれ？ウチも寝てた。」予想通り夏海が被さるように寝ていたらしく、よだれを拭きながら覚醒する。
「ぼくが寝ている間に何してたの？」テレビはつきっぱなしで、まだ寝る前のアニメが続いていた。
「いやあ、気づいたらボク君が気持ちよさそうに寝ていたんでついウチも・・・、と思ったら寝ちまった・・・。」
「ぼく病人なんだから寝るのは当然だよ。」
「めんごめんご、しっかしよく寝たなあ。」大きく伸びをすると、夏海は身体に違和感を覚えて顔を歪めた。
「ボク君、・・・もしかして寝ているウチをいい事に、揉んだ？」振り返りながら夏海は真顔で見ていた。
「なにを？」
「ウチの・・・、おっぱい。」
「え！・・・そういえば、さっき苦しくて足掻いてる時に柔らかいものを掴んだかも・・・。」右手に残る感覚が思い出される。
「ボク君、・・・高くつくよ。」
「えっ！」
「ふっふーん、ボク君の弱みをとうとう見つけたよ♪蛍に言われたくなかったら・・・。」脅しをかける夏海にぼくはタジタジするが、ちらっとテレビを見るといつのまにかアニメはおわりホームビデオになっ

ていた。
「ねえねえ夏海お姉ちゃん・・・、あれ。」
「ふっふっふっ！言い逃れは・・・!!」夏海もちらっとテレビを見ると、小さい頃の自分が写っていた。

『あー、にいちゃんだー!!ウチにいちゃんのお嫁さんになるー！』
ダダダっ！ブチッ!!
テレビの前に瞬間移動したかのような夏海がスイッチを切って硬直していた。
・・・　・・・　・・・・　・・・・
・・・・・・

「・・・とりあえず、これでチャラって事で・・・。」ぼくはゲームをしながら、落とし所を見つけて一言を言うが夏海には届かない。
「あああああああ・・・。」悶絶しながら夏海は床の上を転がっていたのであった。

「ボク君、夏海先輩、お昼食べ・・・。どうしたんですか？」蛍が扉を開けながらお昼を促すがその光景に瞳を丸くする。
「うん、ちょっとね。中二病みたいなものが爆発して・・・。」
「・・・？夏海先輩は中一だけど・・・。」
「似たような症状だけどすぐに収まるから、夏海お姉ちゃん、治ったら降りてきてね・・。」蛍の背中を押して部屋を後にした。

「うわあ、これが茶粥。お茶の味がして美味しいー。」ぼくはサイコロくらいに切られたお芋が入った茶粥を食べながら舌鼓を打った。
ほうじ茶の風味と、サツマイモのほのかな甘みが食欲を失ったぼくに優しく胃袋へと浸透していった。
元気な４人は焼きそばが準備され、食卓を囲んでいた。
「よかったわ、その食欲があればすぐになおるわよ。」おばちゃんは優しく微笑んで、おかわりを要求するぼく君の茶碗を受け取ってよそっ

てあげる。
「焼きそばも美味しいです。蛍はいいなあ、こんな美味しいご飯食べてるんだ。」小鞠は丁寧に食べながら蛍に感想を言うと嬉しそうに頷いた。
「夏海ちゃん、どうしたんでしょうね？」おばちゃんが心配していると、夏海がよろよろと一階に降りてきた。
「・・・あれは応えたー、アルマゲドンと地震が一度に来た気分だわ。」
「あっ、夏海お姉ちゃん！落ち着いた。」
「なんとかねー・・・。ボク君！これでウチらの友情はさらに深まった、これからも夏休みを謳歌しようではないか。」
「・・・う、うん。」夏海の妙なテンションにみんなは唖然としながら夏海は焼きそばにがっつき出すのであった。

一方その頃、越谷家で掃除をしていた雪子が布団の中から見つけた一学期の成績表とテストを発見し、本物のアルマゲドンが夏海に降り注ごうとしていたのだった・・・、その殺気に気付いた卓はすぐ様家を脱出したそうな・・・。

「午後からどうしよっか？」小鞠はお腹が落ち着くとお昼からの話を相談する。
「ボク君には悪いけど、暑くなってきたから川で飛び込みでもしよっか！今日はれんちょんとほのかちゃんが川でカニを取るとか言っていたから合流しよう。」
「うん、お見舞いありがとう。ぼくは昼からも寝ておくよ、夏海お姉ちゃんのゲームしばらく貸してもらっていい？」
「いいともいいとも！ただしあのアルマゲドンは慎重に保管するように！」夏海はぼく君にしかわからない暗号であのビデオの取り扱いに釘を刺された。
「うん、わかったよ。じゃあぼくは二階に行くね。」お腹が満たされたぼくは部屋に戻る、みんなは見送ると一斉に家を飛び出した。
「あの、飛び込みってなんですか？」蛍はその言葉におどおどする。

「その言葉の通り川に飛び込むんだよ、こんな暑い日は川泳ぎに限るよ！」
「大丈夫だよ、ちょっと高いけど快感だよ。・・・あ、そうだ！怖かったら一緒に飛び込んであげる。」
「小鞠先輩と？・・・はい！やってみます。」そういうと夏海と小鞠の２人は笑い、蛍を促すように走り出していった。

二階からそのやりとりをみていたぼくはちょっと羨ましく思いため息をつく。
「飛び込みかあ、ぼくもやってみたかったなあー。」布団に入って本音を言った。薬のせいか随分体は楽になっているが、行くと言えばおばちゃんに止められるだろう。
「早く治ってくれないかなあ・・・。」ぼくは、そう願いながら再び眠りについていった。

ぼくは夢を見ていた。
それは幼い時に行った北海道で遊んだあの一日。牧場で草滑りをして、怖くて途中で転んで泣いたっけ・・・。
みどりちゃんに手を引かれて遊びまわって楽しかった、牛を見て泣いて、ベルトコンベアに乗って泣いて、あれ？これって楽しかったのかな？
それで夕方にみどりちゃんと・・・って、あれ？なんか約束したような・・・。なんだっけ？

夢が覚めた頃、目がさめる。
「あれ？なんでみどりちゃんの夢を見たのかな？」不思議に思うぼくは喉が渇いて一階に降りた時、おばちゃんが片付けをしていた。来客がいていたのだろうか、カップが二つあった。
「あら？今目が覚めたの、さっきまでみどりちゃんがきていたのよ。ボク君と遊びにきたみたいだけど、風邪って聞いてお見舞いに変わっちゃったんだけどね。」

「そうなんだ、みどりちゃんに悪いことしちゃったな。」
「また今度遊びましょう、って言ってたわよ。早く身体を治して遊びに言ってらっしゃい。
それにしてもみどりちゃん、親戚の集まりで一回あったけど大きくなって・・・。」
「・・・だから夢を見たのかな?」ぼくは懐かしい幼き日々を思い出していた。
ぼくはみどりちゃんとなんの約束をしたんだろう、本人には聞いては行けない気がして自問自答をするのであった。

８月５日の深夜

風邪により臥せっていたぼくは目を覚ます。
よく寝たせいかすっかり元気になり、これ以上の睡眠は出来ないくらいに覚醒していた。
チラッと時計を見ると２２時を回っていた。
「そうだ!･あれを見に行こう!!･」思い立つと着替えを済ませ、懐中電灯や虫取り網、携帯電話などを持って階下に降りた。音を立てないように、気づかれないようにそーっと、そーっと降りていきドアをゆっくり開けた。
無事に外に出たぼくはそのまま夜の探索へと繰り出した。
おじちゃん達から夜は一人で出歩かないように言われていたが、どうしてもここにいる間に蛍を見てみたくなり、いてもたってもいられなくなった・・・。それに夜は昼に見かける虫とは違う、それも捉えて見てみたくなり、その好奇心に負けてしまった。
「確か蛍って川にいるんだっけ、どこにでもいるのかな?」虫取り網で夏草に潜むエンマコオロギを捕まえると虫籠に放り込んだ。
農道を進み、用水路を覗き込むが蛍がいる様子はなかった。
「うーん、水辺にどこにでもいるわけではないのかなあ?・・・あ!確か水辺に草が生えて温度が低くないとダメだったっけ?山側に行ってみよう。」
トコトコと歩くぼく君、さっき捉えたコオロギとスズムシがコロコロ、リンリンと鳴き心地がよく、夏の夜風が涼しく頬を撫でていた。
れんげの近所、住宅が何軒か建っている住宅に差し掛かった時、一台の車がエンジンをかけているのに気付いた。
田舎ではこんな時間に車がエンジンをかけている事はほとんどない、不思議に思い車内を見るとほのかがいた。
ぼくはドア越しにノックすると、ほのかがこちらを向いてくれてドアを開けるとぼくに前におりたった。その顔は憂いを帯びており、さっきまで泣いていたようで涙の跡がすっすらと見えた。
「ど、どうしたの?･」表情からただ事ではない事があるように思えて聞

いてみた。
「お父さんが急な仕事が入っちゃって、東京に戻らないといけないの・・・。れんげちゃんにもお別れを言えてないよー。」
「そうなんだ、もう出ちゃうの？」
「まだ・・・。お父さん慌てていてまだ準備に時間がかかるかもしれないけど、とりあえず乗って待ってなさいって・・・。」
「じゃあ、こういうのはどう？」ぼくはほのかにある提案をすると、彼女は納得したのかその提案を喜んで受けてくれた。
「時間がないから、早くやってしまおう！とりあえず明るい所へ・・・。」
「うん！」２人はすぐそこにある電話ボックスの明かりでぼくの提案した作業を行うのであった。

・・・　　・・・・　　・・・・・　　・・・・・

「ほのかちゃん、じゃあね。」作業を終えたほのかは再び車に戻って、窓を開けてぼくと別れの挨拶を交わしていた。
「うん、ぼくさん。色々ありがとうございました。
　わたし、うどん屋さんで寝ちゃって電車まで運んでくれたのはぼくさんと後から知りました。本当にありがとうございます。」
「ううん、大した事ないよ。本当に少しの間だけだったけど楽しかったよ、東京に帰ってもぼく達はまたどこかで会えるよ。」
「そうですよね、きっと連絡します。」ほのかは小指を差し出すとぼくはその小指に絡めて約束を交わす。
「あっ！そうだ。これ、持って行って。」ぼくはポケットから一つのガラスをほのかに渡した、ほのかは受け取ると光源のある方向にかざすと橙にうっすら光りキラキラしていた。
「これ、ガラスなの？手触りが不思議・・・。」
「ビーチグラスだよ。長い間波で削られたガラスが丸くなったものなんだ、この間の海で探していたんだけどその中の一つだよ。記念にあげるね。」

「ぼくさん、ありがとうございます！わたしこれ宝物にします。」
「うん！・・・・じゃあ、お父さん来たらまずいからそろそろ。
　ほのかちゃん、またね。」
「はい！みんなによろしくお伝え下さい、さようなら。」涙をためたほのかちゃんが手を振る中、ぼくはそっと車から離れるとちょうどいいタイミングとばかりにお父さんとおばあちゃんが出てきた。そのままそっと農道を歩いてその場を後にしたのであった。
「ほのか、ごめんな。突然で・・・、ここでお友達もできたそうなのに・・・。」
「ううん、大丈夫。それよりお父さんが東京まで突然車を走らせないといけない方が心配だよ。」
「・・・、驚いたな。さっきまでぐずっていたとは思えない変わりようだな。」
「本当に、ほのかは偉いねえ。」おばあちゃんはドア越しに頭を撫でていた。
「お母さん、すみませんね。こんな突然で・・・。」
「いいんだよ、あんた達の元気な姿を見られただけで・・・。また遊びにきなさい。」おばあちゃんが笑顔で答えると、お父さんはドライブにシフトを入れる。
「では、また遊びに来ます。」
「おばあちゃん、体に気をつけてね。」２人は別れの挨拶をすると車を発進させた。
　農道をゆっくり走り出すとほのかは少し悲しい顔になり、シートにもたれる。明日、れんげちゃん悲しむだろうな・・・。ほのかは憂いを見せていた。
「あれ？あれは蛍か・・・。」お父さんの言葉にほのかは身を乗り出した。
　車から先に見える、大きなクスノキの枝のあたりに光が見えていた。
　蛍にしては明かりが変だと思い、ほのかは窓を開けて身を乗り出した。

車がクスノキを通り過ぎる時にほのかは確かに見た、枝の上から懐中電灯にさっきのビーチグラスに光源を当てて蛍を演出しているぼく君の姿を・・・。笑顔で手を振っているぼくの姿を捉えたほのかは笑顔で手を振って返したのだった。

「ほのか、あれは蛍か?運転でうまく見えなかったけど・・・。」
「うん!蛍がわたしが悲しい顔してたから慰めに来てくれたのよ、きっと!」ほのかはそういうと、お父さんはふっと優しい笑顔になる。
「たった数日だったけど、これでよかったな。ほのか・・・。」
「うん!楽しかったよ!!・・・でもあたしの夏休みはまだまだあるんだから、帰ってもどこかへ連れて行ってね。」

２人の帰路の無事を願うぼくはしばらくクスノキの上で車の明かりが見えなくなるまで見送っていた、ポケットにあるビーチグラスを握りしめて・・・。
「あれ?ぼくが帰る日は、いつだろう?」不意に思い出す・・・、お母さんが赤ちゃんを産んだら、って・・・。夏休み中に生まれなかったら?逆に明日生まれたらどうなるんだろう?
「あっれえー、ぼくもいつ帰るのか分からないや・・・。」なんともはや、釈然としなくなりながらクスノキから降りると帰路についた。
今から蛍を見つけたいとは思えない、それに眠気が再び襲って来たので今日は諦めようと思った。
「蛍を見る機会はまだあるよね、神さま・・・。」どことなく聞いてみるが当然答えはない、それでもぼくのここでのなつやすみはまだまだ終わらない、そう言い聞かせて一条家へと戻るのであった。

8月6日の朝

絵日記
8月5日
今日は朝からばてばて・・・。
ほのかちゃんが東京に帰っちゃった、ぼくも帰ったら会いに行ってみよう。

2日連続で夜に絵日記を忘れたぼくは頭をかきながら反省する、やはり1日の終わりに書かないと少しだけ絵の質が落ちているように感じた。ノートをしまうといつものラジオ体操に繰り出す。
今日の体操は少し気が重かった・・・。

軽快な朝の体操に混じってダンスを踊る相変わらずなれんげちゃんに、ぼくは隣で体操する。
「にゃんぱすー。」僕から声をかけるとれんげは目を輝かせていた。
「ボク君からウチの挨拶で来るとは、ようやくここのルールがみにしみてきたんな!それよりも、もう体は治ったのん?」
「うん・・・、すっかり・・・。れんげちゃん。ラジオ体操が終わったら話がしたいんだ、ちょっと時間をくれるかな・・・。」
「!・・・。ボク君どうしたんな、なんかいつもと雰囲気がちがうのん。」
「ちょっと真剣な話なんだ。・・・だから、お願い。」ぼくのただならぬ気配にれんげは頷いた。
「ありがとう。・・・じゃあ!元気にいくよ!」ぼくはれんげのダンスに負けじと体を目一杯動かした。
「ボク君・・・、本当にどしたの?」れんげは小さくつぶやきながらダンスを続けるのだった。

体操が終わり、いつもの恒例の雪子さんのスタンプ作業の中で公園のはずれで昨夜の一件を伝えた。次第に悲しくなったれんげは瞳から涙がこぼれだした。ぼくはポケットからハンカチを取り出すと

そっと拭くと、ぼくのシャツに顔を埋めて鳴き声のない涙を溢れさせていった。
「ほのかちゃんもすごく泣いていたよ。れんげちゃんに顔を合わせてさよならしたかった、って・・・。
だからね、この携帯で動画を撮っておいたんだ。」
ベンチに携帯を立てるようにしておくと再生ボタンを押す、れんげは食い入るように画面に顔を近づけていった。

「れんげちゃん、お別れの言葉も言えずごめんなさい。
ほんの数日だったけど、すっごく楽しかった!ありがとう!!
ここはお父さんの実家のある場所だから・・・。また今度休みがあったら遊びに来るね、だかられんげちゃんも・・・、泣かないでね。」
ほのかの最後の言葉で泣いてしまう、それをみていたれんげもとめどなく泣いていた。
「・・・ごめんなさい。・・・れんげちゃん、今度会う時は今日見に行く予定だった水車を見せてね。約束だよ。」画面でゆびきりのポーズをするほのかちゃんに、れんげもまた小指を画面越しできりあった。
動画を切るときにはれんげはごしごしと涙を拭いて、いつもの顔に戻る。
「ありがとなん、ボク君が出歩いてなかったらこの動画を見れずにもっと落ち込んだと思う。だから・・・。」
「うん、わかってるよ。れんげちゃん、これ・・・。」ぼくはポケットから例のビーチグラスを取り出してれんげに渡した。
「・・・綺麗なん、貰っていいのん?」
「うん、ほのかちゃんには橙のグラスを渡したけど、れんげちゃんは青のグラスをあげる。」
「・・・大事にするのん。」たすき掛けにかけていたポシェットに大事にしまうと、ぼくに丁寧にお辞儀をすると雪子さんのスタンプを貰って帰っていく・・・。もらい終わった後、その足取りがしばらくしてぴたりと止まると振り返った。
「ボク君は、勝手ないなくならないように!ウチ・・・、もっと泣いちゃ

うんな!!」びしっと指差すと、走り去っていった。
「うん・・・、ボクは大丈夫だよ。」走り去るれんげの背中に小さく答えたのだった。
　ぼくも大仕事をやり遂げることができたと、一つ息を吐いて安堵して雪子さんのスタンプをもらいに行った。
「ぼく君もやるねえー、れんげちゃんを振るなんて。
　・・・あの子のどこが気に入らなかった？」
「え？なんの、事？」ぼく君のスタンプは雪子さんの押し付ける圧力で液が深く刻まれ、その部分がシワになっている。
　これは、まさか夏海のいうアルマゲドンでは・・・。
「れんげちゃんを泣かすなんて、いいお大尽ね・・・。」雪子の目は冷たくぼくを射抜いていた。
「え？いや、ちが・・・。」ぼくはしばらく雪子からの追求に朝ごはんが伸びて行くのであった。

「ボク君・・・遅いなあー。せっかく先に帰って目玉焼きとソーセージ焼いたのに・・・。」両親はすでに食事を済ませておじちゃんは出勤し、おばちゃんは家事に勤しんでいた。
　蛍はまだ帰らないぼくを待ってくれていて、テーブルに突っ伏していた・・・。不意に自宅の電話が鳴り、蛍は近くの子機で受ける。
「あっ！蛍？私、小鞠。」
「先輩！どうしたんですか？こんなに朝早く。」
「えっと、今日よかったら街までお出かけしない？・・・昨日、うちの家にアルマゲドンが落ちて夏海が外出禁止になっちゃったんだ。
　お母さんが帰ってくる前に出かけてとばっちりが来ないようにしたいんだ。」
「はい！行きます！・・・・・・。わかりました、じゃあ駅で！」電話を切ると、蛍はにぱーっと笑う。
「先輩と街へお出かけー。・・・はっ！服どうしよう、目一杯おしゃれしないと・・・。おかあさーん!!」

「ただいまー。」ぼくはとぼとぼと一条家のドアを開けて帰ってきた、雪子さんに散々冷たい目で睨まれた挙句ようやく誤解が解けたときには8時を回っていた。
　お腹もぐうぐういわせており、テーブルに突っ伏した。
「ボク君、やけに遅かったわね。蛍がご飯一緒に食べようとしてたけど、用事ができたみたいでさっき出かけたわよ。」
「そうなんだ、お姉ちゃんに悪いことしたなあ。」
「ふふっ、ラップしてあるからそれ食べて遊んでらっしゃい。・・・それと、夜遊びなんてしちゃダメよ。」
「ぎくっ!!」ご飯を口に入れておばちゃんの言葉につい咀嚼もそこそこで飲み込んでしまう。
「ボク君の部屋に掃除に入ったらびっくり!蛍が一匹飛び回ってたのよ。捕まえて網に入れておいたけど、夜中に歩き回らないでね。
　万が一の事があると悲しむ人がいるんだからね。」
「ごめんなさい。」
「わかってくれればいいのよ。好奇心旺盛なのはいい事だけど男の子はこの時期に事故が多いから・・・、無茶はしないでね。」
「うん!わかったよ。」
「いい子ね、気をつけて目一杯遊んでらっしゃい。」おばちゃんはそういうと、台所を後にした。
「そっかあ、蛍お姉ちゃんは留守かあ・・・。あっ!ちょうどいいや、その間に頼まれてたゲーム機直しておこうっと♪」食べ終わると二階に上がり、蛍の部屋に入る。
　ゲーム機のコントローラーの調子が悪いといっていたので早速トルクスドライバーで開けて調べていった。
「うーん・・・。あっ!バッテリーの接続ケーブルが焼けてるなあ、バッテリーの電圧が落ちると焼けやすくなるからバッテリーも手配しておいた方がいいかな?」手直しをしつつ、バッテリーの型式を控えて後からネットでまだ購入できるかどうか調べる事にする。

「それにしても・・・、お姉ちゃん急いでいたのかな?服がベットに散乱してる。」
　さっきまで着ていた服から、お洒落着まで色々引っ掻き回したそうでベッドにはいろんな種類の服が置いていた。
「!!ボクも着れるかな?」不意に頭によぎるのであった・・・。

8月6日の午前

ぼくは蛍の部屋にある映し鏡で確認する。
「なかなかにあうじゃん♪」ぼく君が着られそうな服をいくつか見つけて着込むとなかなかどうしてかにあう格好になっていた。
ぼくが選んだ服は青いワンピースに帽子は白いキャペリン、もともと線の細い、色白の男の子なので頭を帽子で隠せば女の子に見えなくはない・・・。
早速これでみんなを騙せるかどうか、試したくなり外に出かけたのだった。
「靴は、これでいいか!」ピンクのサンダルを見つけた僕は、靴下を脱いで外へ出かけたのであった。
「うーん、なんかスースーして落ち着かないなあ・・・。」ぼくは歩きながらぶつくさと言いつつ、ジェットサイダーの王冠集めを怠らない・・・。目が自然と茂みやら物陰を見ながら歩き、見落としていた一個を見つける。
さて、誰からからかってやろうかな・・・。
この服を知ってるのは蛍、彼女に見つかったらアウトだけど今は街まで買い物に行っている。小鞠も一緒・・・、それ以外の誰にしようか・・・。うん!あの人にしよう!!ぼくは狙いをつけて向かう先は・・・。
「ふふふ・・・。これなら絶対にバレないぞ!どんないたずらしてやろうかな。」噛み殺すように笑いながら歩くいていると・・・。
「すみません。」声をかける人がいた・・・、振り返るとそこにはなんとみどりちゃんがいた、ぼくは予想外の遭遇に一瞬名前を呼んでしまいそうになる。
改めてキャペリンを深くかぶり直して正体がバレるのを防ぐ・・・。
心臓が早鐘のようになりだし緊張が走った、これは去年の冬に舞台で主人公を演じた以上にやってきた緊張感であった。
「はい、なんでしょう?」みどりちゃんはかなり汗をかいていて疲労困憊であった、顔色も悪くてフラフラしている・・・。

「一条さんのお家はこのまま真っ直ぐで大丈夫ですか？」
「え？・・・はい、合ってます。
　でも、どうされたのですか？疲れてるみたいですけど。」
「実は、バスで向かってたんだけど財布をバスに落としてしまったみたいで・・・。探しているうちに降りるところで降り損ねて、慌てて降りたらどちらも中途半端になっちゃったんだわ。」しっかり者のみどりがそんな事になるなんて・・・、ぼくは少し以外な一面を見れてこの姿になった価値はあったかも、と思ってしまった。
「そうだったんだ、でも一条さんのお家も距離があるし・・・。よかったらそこで少し休んでお財布を探す方法を聞いてみましょう。」
　ぼくが目指そうとしていた駄菓子屋を指差した。
「え？でもわたしお金もってないよ。」
「ぼ・・・私に任せて！今日は暇だし・・・。それにあなたのその訛りからして地元ではないのでしょう、一緒に探してあげる。」
「でも・・・。」
「いいからいいから！一条さんの家の用事があるなら、よってからでもいいけど・・・。」
「うーん、ちょっとお見舞いがてらに覗きにきただけだから急ぎではないかな・・・。じゃあ、お願いします！助けて下さい。」
「うんっ！じゃあ早速聞き取りしましょう。」ぼくは駄菓子屋へと入って行った。

「いらっしゃい。・・・確か君は海でいた子だね。」楓は海での出店した時にいたみどりを思い出した。
「はい！みどりと言います。」
「よろしくな。・・・そっちの子は？」
「え？私・・・。私は・・・、こはくって言います。」ぼくはとっさで迷ったが、ビーチグラスの珍しい色が琥珀色っていうのをネット検索して知ったので、それを名前にして名乗った。
「こはくちゃんか・・・、聞かない名前だな。」楓は色々と考えているが、まずいボロが出るかも・・・、これは先手を打った方がいいと考

えたぼくは。
「おねえさん。そのみどりさんが、バスにお財布を落としちゃったみたいなの、何かいい方法はない？」
「え？財布を・・・。この辺りのバスは最後は隣町の終点に集まるからバス会社のある停留所に行けば見つかるかもしれないな・・・。」
「みどりちゃん、行ってみよう。きっと見つかるよ！」
「うん！ちょっと元気がでてきたわ。」みどりは立ち上がって早速行こうとする中、ぼくは・・・。
「お姉さん、かき氷のイチゴと小豆下さい。」みどりの手を繋いで制止すると、かき氷を持って外の長椅子へ座らせた。

「なんでいかないのさ・・・。」みどりは小豆のかき氷をしゃくしゃくしながらぼくに非難した。
「みどりちゃん汗だくだよ、ここで休憩して水分取らないと倒れちゃいそうだから。」ぼくはイチゴのかき氷を頬張ってかえす。
「でも・・・。小豆のかき氷が好きってよく知ってたね、偶然？」
「ぎくっ！・・・あっ！ほら！疲れた時は甘いものが必要でしょ！小豆はカロリーもあるからいいかなっと・・・。」ぼくは失態の修正に都合のいい言い訳を考えついた。
「こはくちゃん、ありがとう。こんなに親切をしてくれる人はボク君以来だよ。」
「・・・ぼく君？」
「こはくちゃんも知ってる？夏休み中こっちで一条さんの家でお世話になってるの。」
「・・・ごめんなさい。一条さんのお家の人は知ってるけど、ぼく君は会ったことないです。」
「そっかあ、ボク君は私の従兄弟なんだけどなんだが不思議な男の子なんだわ。」
「そうなんだ・・・。みどりちゃん、そろそろ。」ぼくは嫌な方向に話が進みそうなのでかき氷も食べ終わったし行こうとするがみどりがスイッチが入ってしまって話を続ける。

「私の大切にしてた目覚まし時計をバラバラに分解するわ、リモコンの赤外線は鏡で反射してテレビをつける事が出来るか実験してみたりするの、おかしいでしょ！

草滑りでスピードに乗ると大泣きして、夜に牛を見せたら目が光っているのをみて人魂だー、って言ってまた大泣きするし。私と相撲して負けてべそかくし、まー情けない男の子なんだわ。」

「・・・・・・へー、そうなんだ。」ぼく、そんなのしたっけ？

「でもね。ボク君は本当に優しくて・・・、私救われたんだ。」

「えっ？何が・・・。」ついボクはこはくちゃんになりきれず普通に語り返してしまう。みどりちゃんは感慨にふけっているのか、かえす言葉はなく彼方の雲を見続けていた。

「ごめんなさい、変な話をしちゃったね・・・。さあ、いくよ!!」みどりちゃんは立ち上がるとボクのかき氷の器を一緒に楓へ渡すと歩き出す。

「ま、待ってよみどりちゃん！・・・楓お姉ちゃん！ごちそうさまでした。」

「お、おう・・・、お粗末様でした。」慌てて出て行くぼくに手を振るのであった。

すっかり元気になったみどりはさらに向こう側の隣町へ歩き出す。バスで行こうと提案したが、みどりは歩いて行くと言い出したのだ・・・、なんでも北海道では見当たらない物が多くて歩くだけでも楽しいらしい・・・。

まさか女装したまま過酷な歩き旅になるなんて、神様は悪戯を許してくれないそうである。はあ・・・、と小さくため息を吐くが満更嫌というわけではなかった。それはみどりの口からぼくが忘れてしまっている吉本家での記憶を教えてくれるので、この機会にぼくの脳裏が何かに反応して蘇る事を期待していた。

８月６日の午後

「まだ着かないのかな？」みどりの弱気な言葉が飛んでくる。
　ぼくはポケットから携帯電話を取り出してＧＰＳで居場所を突き止めて、目的の停留所を調べた。
「まだまだですね、あと７キロくらいはあるよ。」
「うえー。やっぱりバスに乗ればよかったかな？」
「・・・今更遅いよ、それに気付くなんて。」ぼくは子供の歩く速度で考えると二時間くらいと見積もる・・・、暑さで汗がとめどなく流れ出るが帽子は絶対に取ることは出来ない。汗があちこちで服に張り付いて不快感を生んでいた。
　ジーワジーワと泣いているアブラゼミの鬱陶しい暑苦しさに耐えながら、ぼくとみどりは次第に口数は少なくなり、あたりを見回すと言っていたみどりはその余裕をなくし、ただ足を前に運ぶだけの作業になっていった。
「ねえ？みどりちゃん、北海道はやっぱり涼しいの？」
「涼しくはないべさ、北海道も短いけど３０度を越すこともあるわさ。・・・って！私、北海道に住んでるっていったっけ？」
「え！・・・！違ったかな？その訛りは北海道のものだったから。」僕は慌てて切り返す、みどりは一瞬納得したが勘が鋭くて逃れられない。
「その割には、断定して言い切った感じがするけど・・・。」みどりちゃんは少し不審がって帽子の中身を覗き込もうとするが、とっさに深くかぶり直して誤魔化す。
「あっ！みどりちゃん、あそこに無人の販売所があるよ。休憩ついで少しお腹に入れよう！」とたとたと走るぼくを目で追いかけるのであった。
（あっぶなー！みどりちゃん勘良すぎ！）無人販売を覗き込むと茹でトウモロコシがカットしてある皿を見つけ、お金を投入して取り出した。
　横には水道もあり、水を水道から直接ガブガブ飲んでトウモロコシ

を頬張った。
「こはくちゃんは服装の割に男の子みたいね。」ぼくの様子に再びギクリとする。たしかにワンピースにこんなキャペリン被れば小さいとは淑女そのものである、ほたるお姉ちゃん小さい時から女子力半端ねーと心の中で叫んでしまった。
　対するみどりちゃんは髪こそ伸ばしてはいるが、服装は動きやすいスボンに水玉のシャツ姿と夏海お姉ちゃんと変わらなくボーイッシュである。
「そ、そう?この辺じゃあ、別におかしい所はないよ。みどりちゃんもやって見なよ。」
　みどりは視線をトウモロコシに落として見つめると、茹で上がって時間が経っているにも関わらず甘い匂いがまだ残っており、そして瑞々しい・・・。その黄色い粒々をみていると自然と唾液が溜まり、かぶりつくとその粒々が甘みを弾けさせて喉に落ち込むと爽快感を得るのである。そしてぼくと同じように水道の水を飲むと、水にも甘みがついたかのように変貌していつのまにか同じようにガブガブと飲んでいたのである。
「確かに、そうかも・・・。」みどりの住む北海道ではトウモロコシはよく取れる名産の一つであるが、この暑さの中で歩き回り喉もカラカラだと食べる炭水化物と水分はそれを飛び越えて美味しく感じた。
「でしょ!元気出てきた。」
「うん!バッチリ元気。琥珀ちゃんありがとう。」
「ナンモさ。」北海道の言葉で締めると二人はひとしきり笑って、歩き出した。

「・・・そういえば、みどりちゃんはどうしてここにきたの?」
「この夏休みに弟か妹が生まれるんだ、毎日牧場の手伝いしてるから邪魔にならないはずなのに親戚が手伝いに来てくれるからいいってさ。
・・・まあ、生まれたらそれこそずっと働きづめになるから、最後の長期休暇を楽しめってことなんだわ。」

「牧場って大変なんだね。毎日何気に飲んでる牛乳とかお肉を大事にしないと罰が当たるような気がするよ。」
「ふふっ！ちょっとでもわかってくれたら嬉しいな。」みどりははにかんで頬を緩ませた。
「ボクくん・・・、私の親戚なんだけど小さい時に来た時は随分好き嫌いが多かったなあ。うちの野菜とか牛乳を飲んで随分好き嫌いがなくなって帰っていった時は嬉しかったよ。」
「へえー。よっぽと美味しかったんだね、みどりちゃんの家で取れる食べ物・・・は・・・。」ぼくの頭の中に突然浮かぶ真っ赤なトマト・・・、それは唐突に現れて心臓が大きく拍動した。
・・・そうだ、ぼくはみどりちゃんの家で確かに数日過ごした。みどりちゃんは小さい時はもっと男勝りで、ぼくはよく泣かされていた。
あ！・・・あれは、トマトだった・・・。みどりちゃんはある日、心無い男の子に家のトマトを勝手に食べられた挙句、そのトマトをまずいといって投げつけられたんだ。
スカートにべっとりとトマトの赤い果汁が付きその場で崩れて泣いていたみどりちゃんを余所目に、僕はその子に飛びかかったんだっけ。二人とも畑で取っ組み合いになって泥だらけになってもボクは手を緩めなかった・・・、最後にはその男の子は泣きながら逃げていったけど、本当はぼくの方がとっくにベソかいても不思議じゃなかった。
「みどりちゃん、もう大丈夫だよ。」ぼくは畑のそばにある水道のホースを持ってきてみどりちゃんのスカートに水を落として洗い流す、トマトの果汁は水では落ちないが早く処置しないと洗濯でも落ちなくなりそうだと思っての行動だった。まだ泣き止まないみどりちゃんにぼくはうなだれると、そこにはさっき投げられたトマトが泥にまみれて潰れていた。
「ほら、みどりちゃん。」ぼくはそのトマトを拾い上げ、水ですすぐとおもむろにトマトにかぶりつく。
「あ・・・！」みどりはあっけに囚われていたが、ぼくは笑顔で答える。

「なんだ、不味いっていってたけど嘘だね！みどりちゃん家のトマトは美味しいよ。」ぼくはそのままそのトマトを胃に落とし込んで笑いかける。
「みどりちゃん、一番美味しそうなトマトはどれ？もう一つだけ食べたいな。」みどりちゃんは、すっと笑顔を見せるとぼくの手を引いて案内してくれた。
・・・そうだ、ぼくはこの一件から野菜をたくさん食べ始めんたんだ、あの時みどりちゃんが泣きやんでくれる一心で考えて起こした行動からぼくは好き嫌いがずいぶん減ったんだ。なんで忘れていたんだろう。
「琥珀ちゃん、どうしたのさ？ぼさっと歩いちゃって。」
「・・・ごめんなさい、なんだか昔の事を思い出しちゃって。」
「へえ、どんな？」
「・・・・・うまく言い表せないかな、なんか心臓がどきどきしてるけどみどりちゃんに口で伝えてもわからないような、へんな気持ち。」
「・・・わかるべさ。」
「えっ？」ぼくはどきりとしてみどりちゃんを見る、彼女の目はとても澄んでいて遠くを見つめるかのような表情に二度どきりとした。
「私も、そうなんだもん・・・。」そういうと彼女は走り出す、まるで火照った体を無理に風を切って冷やすように・・・。
陽が傾きすっかり冷えた風を浴びたみどりちゃんが、息が切れるまで走りついた先は目的の停留所であった。
目的の財布は無事に見つかり、二人は無事帰りのバスに乗ることができたのであった。

８月６日の夜

夕食を済ませ、部屋に戻ってきたぼくの手には大きなダンボールの箱一つ、にやりと笑っていた。
「ようやく届いたなー・・・、よし！これで」部屋の片隅にあるシーツに包まれた物体に手をかけてバサァ！とお披露目する、まるでアニメに出てくるマッドサイエンティストが好みそうな演出である・・・。
楓からこの夏拝借していた釣竿である。しかしそのフォームはすでになく、ロッドは素材から変更されており軽くて折れない物に強化されていた。この夏休みで手に入れた資金を元にネットで資材を購入していた、もはや楓の釣竿は原型をとどめていなかった・・・。
「うん！これなら陸に引きずり出せるよ！」箱から勢いよく取り出すのは動力モーターと制御インバータ、早速それらのケーブル組み込みを始めた。取り扱い説明を見ながら電動ドライバーを駆使して接続を始める。
「えーと、Ｒ．Ｓに挿して、ＶＣＣ？なんだこりゃ・・・。」ガチャガチャとマニュアルを片手に作業している時、蛍がノックして入ってきた。
「ボクくん、お風呂空いたよー。って！なにこれー!!」タオルで頭を拭きながらその光景に驚く。
「あっ、蛍お姉ちゃん！そこ踏まないで。」
「うん・・・、ボクくんこれなんなの？」そーっと、床にあるコントローラーを避けると覗き込んだ。
「どうしてもこの間逃げられたあの主を釣りたいんだけど、ボクと蛍お姉ちゃんの力を合わせても釣り上げなれないからアシスト君を作ってるんだ。」ボクは圧着端子でケーブルの先端処理をすると作成してスイスイと接続していく・・・。その度にガチャ！ガチャ！と音が響き、電動ドライバーで締めていった。
「へえー。って、普通に言ってるけどすごいことしてない！」
「単純だよ。このモーターで釣り糸を引っ張らせるんだけど、モーターに繋げるだけだったら一定のトルクで引っ張るだけになるから

釣竿が折れちゃうか釣り糸が切れちゃう。でも制御インバータを使えば、高効率でかつトルク制御のプログラムをインプットしておけば、負荷に応じてトルクを調整できるんだ。」
「やっぱり私にはちんぷんかんぷんだよ、でもボクくん？これって電気がいるよね、どうするの？」
「そこは大丈夫！助っ人をお願いしてるから。」にやりと笑うぼくくんに戦慄すら覚える蛍、目的の為なら手段を選ばない彼に将来を不安視していた。
「よく、こんな部材買ってきたね。お金大丈夫？」
「新品じゃないよ。このモーターは粗大ゴミであった洗濯機をバラして取り出したモーターで、このインバータは工業用機械の解体で出てきたジャンク品なんだ。価値もわからないのに売り出してる人がいたから丸め込んで２０００円で売ってもらったんだ、新品なら３万はするけどね。」
「ボクくん、なんか悪いことしてない？」
「あんなの売っててもも普通の人には買い手がつかないよ。東京の秋葉原とか大阪の日本橋ならともかく、一般人が見ても何に使うかすら知らないだろうからね。」一通りの接続が完了し、端子の見えているところを絶縁テープと結束バンドで固定してヒゲをニッパーで丁寧に落とす。ケーブルはひとまとめにされると蛇腹ホースで保護して完成のようだった。アース落ちのチェックをマルチメーターで確認してコンセントに接続すると、制御インバータにＬＥＤが表示された。
「さーて、と。」彼は小さなマニュアルを読みながら制御インバータになにやら数値を入力していった。
「まだ、完成じゃないの？」
「うん。このプログラム部分にどれくらいのトルクで動かしたりとか、負荷のかかり具合でどうするかを入れていくんだ。」ページをめくりながら必要項目によくわからないデータを淡々と入力するボクくんを相変わらず目を白黒させていた。
「あっ、お姉ちゃん。その竿の先についてるボールを引っ張ってみて。」指を指す方に釣り針に付けられたテニスボールを引っ張ると、竿

の根元の釣り糸が伸ばされ出す。
　すぐに制御インバータが検知すると、モーターがすぐ様動き出して収納ドラムが回転されて引かれた糸を引っ張り出す。
「えっ！」すぐ様引っ張った力と拮抗する形になり蛍は驚いた。
「お姉ちゃん、もっと強く！全力でもいいよ。」
「えっ？じゃあ、えい!!」蛍は精一杯の力で引くと再び制御インバータが検知してトルクを上げだした、途端にまた拮抗する。
「えっ！すごい、・・・負けちゃいそう。」蛍は体格からか、女の子にしては力は強かった。それでもすぐ様そのトルクに追従する制御インバータに拮抗される、そしてそこから徐々にトルクを上げられていきとうとう体を持っていかれだした。
「やった！完成だ!!」ぼくは機械を止めて、その手応えに満足する。
「そっか、釣り糸がきれないように相手の力に合わせてモーターの回る力が変わるんだね。」ようやく蛍は理解して、ボクくんの発明品にすごさを感じた。
「うん！電動リールを買えばいいんだけど高いからね。それに自分で作った道具ならズル、じゃないかと思って・・・。」
「うーん、ギリギリセーフかな？」蛍は首を傾げながら答える。
「よし、このアシスト君を使って釣り上げるぞー！」
「お、おー！」ぼくくんの号令に蛍は同意して同じ所作を取る、一抹の不安をぬぐいきれない蛍を余所に着々と準備をするのであった。
「蛍お姉ちゃんも見にくる？明日ラジオ体操が終わったらそのままあの池に行く予定なんだ。」
「そうなんだー。行く行く！この機械であの大きな魚を釣りあげるところを見て見たいよ。」蛍はぱあっと明るい表情で頷いた。
「ありがとう、お姉ちゃん。モーターとか重いから人手が必要だったんだ。とりあえずこれ用の台車も作ったから移動は大丈夫なんだけど、一人ではちょっときつかったんだ。」側には木板にストッパー付きキャスターがあり、モーターを取り付けるようにナットと手回しビスがある。さらに木箱ですっぽり覆えるようになっており、駆動中に手が入らない安全性の確保がしてあった。木箱の上にインバータをの

せて設定変更はその場で出来るように配慮、本格仕様であった。
「出来上がりをみると凄いね・・・、ボクくんは将来こういう仕事がしたいの？」
「ん～？わかんない。とりあえず、興味がある事を手当たり次第にしていたら何か見つかるかな？」
「・・・手当たり次第やりすぎだよ。」
「そうかなー。まあいいじゃない、とりあえず今はあのでっかいあのお魚を釣り上げるアシストくんがどこまで頑張ってくれるか見ものだよ。」
「これなら絶対大丈夫だよ。」蛍の大喜びにぼくは首を振った。
「絶対なんてないよ。最善策をとっても初めからうまくいく確率は10パーセントを切る、って博士が言っていた。
　予想外なんて当然、だから実験は面白い・・・。」ぼくは自分にも言い聞かせるように呟くのであった。

8月7日早朝

昨日に書かなかった日記をラジオ体操前に書き込む。
8月7日
みどりちゃんの財布を探しに歩いて停留所に・・・。
消しゴムで消す。
きのう、とうとうアシスト君が完成した！
決戦は近い。

「おおー！今日のボク君は気合がはいっるんなー。」隣でいつものレッツダンシングしてるれんげから声がかかる。
「うん！ラジオ体操が終わったら池の主を釣りに行くんだ！今度こそ吊り上げて夏海ちゃんの釣果に勝ってみせるよ。」手をブンブン振って気合を入れるボクにれんげは両横腹に指を入れる。
「ひゃい！」素っ頓狂な声を上げて体操をしているみんなの視線を浴びた。
「れんげちゃん、なにするんだよ。」
「ボク君は力がはいりすぎなんな、こういう時こそリラックスして魚に気取られないようにするん。」
「・・・本当に、主に読まれるの？」ボクはれんげにからかわれていると思ったが、彼女のだるい目はいつもの目・・・。嘘はついてなさそうだ。
「主は今まで釣られずに生き残った猛者、そう簡単にはいかないんな・・・。それにボク君は最近アタリを逃している、警戒はハンパないはず・・・。」二人は器用に話し合いながら体操を続ける。
「なるほど・・・。」
「今日は水面には近づかず、音も立てずに静かにするのん。
　水中から覗く魚は光の屈折で先までみえているみたいだから、気は抜かないんな。」
「わかったよれんげちゃん、色々ありがとう。しかし、れんげちゃんは

本当に小一なの？」光の屈折を理解する一年生にボクは驚いていた。
それに以前車の速度の話題をしているときにれんげちゃんは時速５０キロメートルを理解していた。
「小三で、いろんな機械を作り出すボクくんに言われたくないんな・・・。」と瞬間に返される。
　さらに横にいた、蛍は・・・。
「２人とも低学年とは思えないよ・・・。」と体操をしながら突っ込んでいたのであった。
　つつがなく体操を終え、昨日完成したアシスト君を乗せた台車をごろごろと運ぶボク。蛍は前回の事もあって付いてきており、れんげも新兵器に興味深々と言ったところである。
「ボクくん、それって電気がいるんでしょ、どうやって動かすの？」
「・・・ちょっとがめついお姉ちゃんにお願いしたんだ。子供相手に足元見てふっかけてきたからたいへんだったよ。」
「だーれが、がめついお姉さんだって？」
「え？」ボクの後ろを通り過ぎつつ、ワンボックスカーのウインドーが開くと楓が睨みながら登場する。
「楓お姉ちゃん♪手伝ってくれてありがと、いてっ！」
「聞こえてたっつーんだ。何に使うかわからんが、せっかく発電機持ってきてやったのにその態度はよくねーぞ。」かるく小突かれた僕は、「はーい」と反省の言葉を入れつつ小突かれた頭をさすった。
「その箱の中身にこの発電機使うのか？」
「そうなんだよ。楓お姉ちゃん、大きいから先に池まで行っててよ。
　あ、蛍お姉ちゃんもれんげちゃんも先に車に乗せてもらう？」
「ウチ、乗せてもらうんー！」れんげは飛び乗る。
「私はボクくんと交代でこれ運ぶよ。」アシストくんをみて一緒に池へと向かう。
「じゃあ、先言って準備しておくからなー。」
「ボクくん、ドンマイんなー！」
　ミンミンゼミが早くも鳴き始め、暑さを感じられるようになる・・・。
　２人は車で先行く２人を見ながら・・・。

「どんまい、ってこんな時に使う言葉だったっけ？」
「・・・れんげちゃんの言う事は気にしないほうがいいよ。」
「・・・蛍お姉ちゃん、それってディスってる、てやつ？」
「あわわわ！ち、違いますー！」
今日も旭ヶ丘は平和であった・・・。

池に着いた時には発電機を車から下ろし、燃料を入れ終わったところであった。
楓はアウトドアが得意なんだろうか？手際が良く、簡易なパラソルまで準備していた。
「楓お姉ちゃん、ありがとう！ボクも早速準備しないと・・・。」台車上にある大きなコンテナボックスから取り出すのは組み上げ前の竿に、アクリルケースに入った動力モーター。うっかり手が入ってベルトに巻き込まれないようにアクリルケースで覆う安全仕様。
竿をケース横にある固定金具に装着すると、釣り糸をガイドに入れてモーター部分で巻き取るように設置する。
そして竿の根本に変わった器具を装着し、モーターの横のコントローラに配線する。
「おいおい、主を釣るのになんて機械を作ったんだ、ボク君」
「昨日見て思ったんですけど、これって自力で釣ったことになるのかな？」
「大丈夫！自分の力で設計、部品調達、組み上げをしたから自力と言えるし、これは自由研究の一環でもあるから！」
ガチャガチャと音を立てながら断言するボクに二人は何もいえなかった・・・。
「よし！これで準備完了。楓お姉ちゃん、発電機お願い。」
「はいよー。」池より十分離した発電機はスイッチを押すと、自動車のアイドリング状態のような音が響く。コンセントを刺してコントローラーのボタンを押すと電源が入る。
「よしっ、いけー。」竿を手に持ってリリースすると、すぐさまアシス

トくんの固定部に差し込んであとは待つ・・・。
「いけー、だけにいけー・・・。」沈黙を続けていたれんげは静かになったタイミングでぽつりと言う・・・。
　ボクは顔が真っ赤になって頭を掻いた・・・。
　さむいボケに主も底に沈んでのか、一向に当たりはなくアイドリングの音だけが響く・・・。
「さて、あとはヒットするのを待つだけだけど・・・暇だね。
　発電機もある事だし、僕は内職でもしようかな？」
「え・・・内職？」蛍は首を傾げる。
「蛍お姉ちゃんのお父さん、昨日お風呂でスマートフォンを湯船に落として電源入らなくなったみたいだから分解清掃しようと思ってるんだ・・・、うまく行ったら治るからね。」
「お父さん？もうー、あの携帯電話は防水じゃないって何度も言っていたのに・・・。」蛍の非難をよそに、精密ドライバーセットと無水エタノール、工業用蒸留水を準備する。
「治るんの？」れんちゃんが覗き込む、ボクはアシスト君を持ってきた箱の上で早速作業を始める。
「多分、湯船に落としてすぐに掬い上げたのならバッテリーのショートはしてないと思う・・・。」
　あっという間にカバーを開け、バッテリーから基板を切り離しバラバラにしていく・・・。カバーは一度蒸留水で洗うと水をキッチンペーパーで拭き取り、夏日に晒す。
「ごめんね、いつもお父さんの修理に付き合わせて・・・。
　よく電化製品を壊すんだ。」
「別にいいよー、ボクにとってはいい小遣い稼ぎだから。」蛍の申し訳なさそうな声に、ボクは答えた。
「・・・ボクくん、これでいくらもらってるんな？」
「今回はなんと3千円もくれるんだ！頑張らないと。」
「な！3千円!!ボク君はお大臣様なんな！」
「え？・・・東京で依頼したら一万円以上はするんだけど・・・。」二人のやりとりに蛍は突っ込む。

「おいおい、需要の少ない田舎をさらにデフレにしないでくれよ。水没、新規購入にならんだろうが・・・。」楓から非難が飛んだ。
「会社の電話だから、壊したら始末書というのを出さないといけないみたいだよ?始末書だしたらボーナスが、とか言ってた。」
「ボクくん頑張って!お願い!!絶対に治してね!!
・・・出ないと、私のお小遣いがー!!」蛍が突然涙目になって叫び出す。
「なっ!ほたるん、どーしたんな!!」
「どうやらボクくんの作業次第で、ボーナスの査定に響くらしい。
とんでもない小学生だな・・・。」楓が呆れ返るようにれんげに説明するが、れんげは得意げな表情に変わる。
「ふっふっふっ・・・、さすがうちが見込んだ男なんな。」れんちゃんの言葉に楓は経緯を思い出して苦笑いする・・・。
・・・
・・・・
・・・・・
パーツによって蒸留水洗浄と、アルコール洗浄、工業用ドライヤーを用いて再度組み上げしたボクは電源ボタンを押す。
蛍はもう、涙目で祈るように見つめていた。
フルーツのロゴが出るが、立ち上がり前にメンテナンス案内が出る。
「あちゃー、機械的には壊れてないけどデータが破損してるな・・・」
「これ?大丈夫なの?」蛍が不安そうになってつぶやく。
「うん!最近入れたデータはダメだろうけど、メンテナンスした時にデータバックアップ取ったからＯＳ再インストール後にデータ復元で大丈夫!追加千円もらってやってあげよう。」
「・・・こまかく刻むな・・・。」楓は感心するように頷く。
「よかったー、この夏ボク君がきてなかったら最悪の夏休みになるところだったよ。」蛍が呟き、ガヤガヤと話し込んでいる中、れんげは池を見つめる。
「どうしたー、れんげ?」

「あしくさ君、なんか動いてるんの。」
「アシスト君だよー、って！ボク君引いてるー!!」蛍の声に一斉にアシスト君へ走る。
アシスト君は、制御インバータを組み込んだ動力装置。
モーター音もインバーターによる波形制御されており、静音動作でみんな気づかなかった。
反対に水面は激しく波打ち、ときおりその魚影が現れる。
「すごいのーん！あしすと君が主を完全に捉えているんなー!!」
アシスト君は主の引きの強さに合わせてトルクがかかるようプログラミングされており、一定の力が入ればトルクを緩めて糸の切断を防ぎ、力が緩むとその分巻き上げるように設計されていた。
魚の体力が奪われ、巻き上げの方が徐々に強くなっていく。
「もうちょっとかな？
・・・あれ？以前の主より大きいような・・・。」みるみるうちに現れる魚影は以前よりも大きく感じる、それは蛍も感じていた。
「それに、ちょっと姿が普通の魚とは違う感じがするよ。」蛍が指差す魚影は確かに年齢を重ねた里鯉とは違い、胴体が長細くて鯉とは思えない・・・、その異質な魚影に固唾を飲んだ。
「あ、あれは・・・。」
「どうした？れんげ？」れんげの驚愕の表情に楓は相槌を打つ。
「この地にも異形の外来種が紛れ込んでいたのん・・・。
あれは、雷魚なんな。」
「雷魚？」ボクも聞きなれないその名前にれんげの言葉に重ねる。
れんげは水面から目を離す事なくこくりと頷く・・・。
「このあいだ、にゅーすでみたのん・・・。日本の川にも適応して繁殖していると聞いたんな。」
「ま、まさか・・・。」信じられないと言った感じで蛍は否定するが、アシスト君が捕らえた魚はみるみる大きく浮かび上がりその異形の姿が露わとなっていく。
バシャ！
大きな波紋と共に水面から姿を現した異形の魚が皆の目に飛び込

んだ。
　その姿は蛇とも思える禍々しさに息を飲む・・・。
「雷魚なん！それもすっごく大きいのん！」
「湧水の溜池に、外来種の雷魚が入り込む訳がない・・・。
　誰かが飼えなくなって捨てたんだな。」少し苛立ちの表情をした楓がつぶやいた。
　アシスト君はその雷魚を池から引き摺り出すと、トルクを失い巻き上げを止める。雷魚は所構わずびちびきと跳ね回った。
「なんか、グロテスクだね・・・。リリースする？」
「・・・いや、外来種は生態系を破壊するからリリースはまずい。
　とりあえず持ち帰ろう。」楓の言葉にみんなは驚く。
「え、あれ持って帰るのですか？」蛍は少し青ざめる。
「少しアテがある・・・、とりあえずあれを入れて移動させる物を準備しよう。」楓は一度車へ戻り、移送の準備を始め出した。
・・・
・・・・
・・・・・
　ピンポーン♪
「はいはーい！」小鞠は、呼び鈴の音に煎餅を頬張ったまま玄関を開ける。
「あっ！みんな朝からどうしたの？」
「お前こそ、こんな朝から煎餅を咥えて出てくるとはな・・・。」楓のツッコミに小鞠は慌てて煎餅を後ろに隠して恥じらう。
「はにゃー！ちょっと美味しそうだったからつまんだだけだよ。
　・・・それで４人で朝からうちになんの用なの？」
「大した事ないんだ、最近雪子さんが池に魚が欲しいと言ってたろ。
　今日、魚が手に入ったんだ・・・、とりあえず放していいか？」
「そうなんだー、お母さんずっと探していたもんね。
　どんな魚？大きいの？」
「・・・ああ、大きさだけは保証する。」
「わかったー、お母さん呼んでくる。」小鞠は再び家に入り、母親を呼

びにいく。
「今、聞いたか？
小鞠から同意はとった、放て・・・。」後ろで無言で頷く3人は、台車の上にあるアシスト君を囲っていたアクリルケースに入っている物を庭の池へと転がしていく・・・。
「へえー、大きな魚が手に入ったの？
夏海もなかなか捕まえられなくて難儀してたからねー。」
「という事は、池の主でも釣ったのか！
誰、誰が釣り上げたの？」
「わかんない、とりあえず駄菓子屋が大きい魚だって言ってたよ。」
「・・・・・・・・・・。」

越谷家の面々が庭に出てくると、池から壮大に跳ね上がる雷魚に驚愕する。
雪子さんはその場で腰を抜かし、小鞠は泣き叫ぶ。
夏海は目を輝かせて驚き、卓は固まる・・・。
「「なんじゃ、こりゃー!!」」
一家の叫びと共に走り去るワンボックスカー、これでは雷魚を捨てた飼い主と同じである・・・。
「これでいいんでしょうか？
先輩・・・、すみません。」蛍は少し涙目になってあやまる。
「大丈夫だ、こういう時は夏海が好奇心でしばらくは面倒見るだろう。
・・・夏海が飽きる前に、それまでの間に飼ってくれる人を探して身の振り方を手配してみる。」楓は運転しながら答えた。
「かみなりおやじ、また会いにいくんなー。」
「・・・・・・また意味のわからん名前を・・・。」
「えっ！それ名前なの？」ボクはれんげちゃんのあだ名のセンスに愕然としながら戻るのであった。

８月７日の昼

雷魚騒動から引き上げた一向は楓の車で送られ、一旦家路についた。

遅い朝食を蛍と談笑しながら食べると、蛍は宿題をする為に自室に戻る。

僕も現在の拾得物を並べて昼からの行動に悩んだ・・・。

現在、ジェットサイダーの王冠は２３種・・・。

初めはよく落ちていたが、ここ２日は見つけていない。そろそろ普段行かないような場所を探さないといけないと思われる。

昆虫はノコギリクワガタとコクワガタ、こちらは全く夏海に勝てるとは思えない・・・。

「んー、そろそろ幼虫が羽化してくれたらなー・・・。」なんの幼虫かわからないが、以前見つけた幼虫に期待する。

おじちゃんのスマートフォンもすっかりデータも復元を完了させ、書斎の机に置く・・・。

今日は電話を家に忘れてしまった、という言い訳にしたスマートフォン・・・、とりあえず電話がかかったらややこしいので機内モードのままにしておいた。それと同時に書斎のドアがあいておばちゃんがボクを呼んだ。

「あっ、ボク君にお客様よ。」

「え、誰だろう・・・。」一階の玄関に向かう。

「・・・・・・・・・。」

「あっ、・・・えと、卓お兄ちゃん。」ボクは玄関に立つここでは珍しい男の子である卓が訪ねてきたのである。

とりあえずリビングに通されソファーに座り、対面に座るがこちらを見据えるだけで声を発しない。

「え、えと・・・、ご用件は？」卓から話しかけてくる様子はないので、こちらから問いかける。卓は一つ頷くと、鞄から出されたタブレット・・・。そこには、先程捕獲した雷魚の姿があった。

そして次のスライドには大きなどじょうが一匹、卓の自漫気な表情

を浮かべて釣り上げた姿が映されていた。
　そして手前にアップの夏海が満面の笑みでピースサインをしていた。
「卓にいちゃん凄い！」
「・・・・・・・・・。」そして沈黙のまま横にスライドすると、どじょうの墓の前でがっくり項垂れている卓をとり、その前で先ほどの写真と同じく夏海が輝く笑顔とピースサインの写真、そして日付は先ほど。
　それをみたボクは背筋がぴしっと凍った・・・。
「も、もしかして・・・、雷魚のせい？」問いかけたボクに、卓は一雫の涙を流して頷く・・・。
「ご、ごめんなさい！まさか雷魚より先にどじょうがいたなんて・・・。」卓は、眼鏡を外してハンカチで涙を拭うとボクの肩にそっと手を置くと一つ頷いた。
「卓にいちゃん・・・、何かボクに出来ることがあるなら、罪滅ぼしがわりに手伝いたいんだけど・・・。」ボクのその言葉を待っていたかのように、卓は眼鏡を光らせる。
　この人、この言葉を待っていたな。と思うくらいに次の行動が早かった・・・。早速、乗ってきた自転車に僕を乗せると凄い速さで移動を始めた・・・。

・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・

　駄菓子屋へ急行した卓は、楓の車に乗ってデパートのある街まで繰り出すことになった。
　楓も、雷魚の件でボクと同じ様な経緯で車を出す羽目になり、それに便乗した小鞠、夏海、蛍、れんげ、卓にボクが街に繰り出す事になった・・・。
「まさか、今からデパートに繰り出すとはな・・・。それで卓、なにが

目的なんだ。」楓の問いかけに再びタブレットを開くと、パソコンが映し出される。
「パソコンを買い替えたいのか？」楓の言葉に頷いた。
「卓にいちゃん、今回は自作ＰＣに挑戦したいみたいだからボクがアドバイス役で駆り出されたみたいなんだ。」
「自作！お兄ちゃん大丈夫なの？」小鞠が問いかけると、卓はボクの肩に手をおいて親指を立てる。
「ボクくん次第か・・・、でも自作がうまくいけばメーカーのパソコン以上の性能で安く作れんでしょ！
　ウチの家のパソコン古いから、にいちゃんのパソコンでゲームが出来る！」夏海が気合を入れた。
「あ、そういう魂胆なんだ。」蛍がつぶやく、たしかに越谷家の家電製品はよく言えば物持ちがいいといえるが、全てが古くゲームはレトロと言えるものしかない・・・。夏海の目が輝くのは無理がなかった。
「ボクくん、どーなん？なっつんの欲しがるパソコンは作れるんか？」
「うーん、卓にいちゃんの欲しいパソコンはゲーム用ではないけど、ＣＡＤも使いたいみたいだから両立できるＧＰＵボードと相性のいいＣＰＵ次第かな？」
「・・・ボクくんの言ってることがほとんどわからないな・・・。」
「私も・・・、蛍は？」小鞠も頷いた。
「えっ、・・・だいたいわかります。」
「蛍すごーい、リケジョってやつ！」小鞠の言葉に蛍は照れる。
「蛍って裁縫とか料理も得意だし、簡単な電気工作も作ったことあるって言ってたし。ほんとすごいねー。」夏海も賞賛すると蛍は真っ赤になっていく・・・。
「そんな、私なんて・・・。理系なんてボク君の方が凄すぎるんだから。」
「へえー、まだボク君には素晴らしい才能があるの？」
「うん・・・。この間、家にボク君の電気工事の免許が届いたよ。」蛍の言葉に楓が驚いた。
「へえー、あの国家資格を取ったのか！君の年で筆記試験は通らないだろう？電気の計算は確か、中２の理科の知識があっても解けないと

か聞いたが・・・。」
「計算問題は、ほとんど捨てました・・・。」
「残りでカバーしたのか・・・。」楓の感嘆する。
「おいおい、最年少取得じゃないのか？」
「ボクより一回分早く受験した人が最年少です。」
「どっちにしても、すごいなあ。」楓とボクの会話にれんげは首を傾げる。
「何がすごいんな？」
「その免許があれば、家の電気工事ができるようになるんだよ。」
「んなっ！」
「試験に合格して、免状の送付をこっちにしておいたんだ。
・・・何か、役に立つかな？と思って・・・。」
（何かに、使う気だ・・・。）楓以外はそう思った。
（何に、使わせようか・・・。）楓は邪悪な笑みを浮かべる。
・・・・・・
・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
「デパートなーーん！」れんげは大の字になって叫ぶ。
「私も久々です、婦人服売り場はどこかな？」
「姉ちゃんは子供服売り場だねー。」
「夏海ー！」
「おーい、好き勝手いくのはいいけど、何かあったら連絡してこいよー！」楓がちらばる前に叫ぶ。
卓は早速、デパートの一角にあるＰＣショップに向かった。
かなりの品揃えで、一通り満足するものが揃っていた。
「えーっ、と・・・。
卓にいちゃん、これはスペック上げすぎだよ。冷却と電源容量を上げないと発熱ですぐ壊れちゃうよ。」卓はふむふむと頷く。
「それにペルチェ水冷って・・・。流行り物を詰め込めばいいわけではなくて、もう少し費用対効果を考えないと。」
「ＰＣなんて長く使える物を考えなくていいから、今必要なスペック

で安く作って必要ならグレードアップするか買い換えるくらいで・・・。」
　近くを通る通行人は奇妙な二人組を訝しげに見ていくのであった。
「いやあー、遊んだ遊んだー。」夏海はゲームセンターでＵＦＯキャッチャーをやっていたのか、微妙なキャラのぬいぐるみがわんさかと入った袋を持って楓の前に現れた。
「相変わらず、身銭がつかない使い方をしとるな。」
「えっ！なんでー、楽しいじゃんー。」
「まあ、お前がそれでいいなら構わんが・・・。」
「れんちょんは、何買ったの？」
「うちは、３６色の色鉛筆な・・・。駄菓子屋では１６色までしか売ってなかったから、具をさらに細かくかいてあげるんなー。」
「すまんな、れんげ・・・。言ってくれれば発注するからな。」
「ただいまー。」小鞠と蛍が更に合流する。
「あっ！姉ちゃん！姉ちゃんは何を買ったの？」
「えっ、蛍が私のシュシュを選んでくれたの。可愛いでしょ！」サイドアップにつけた新しいシュシュ、ひまわり柄がよく映える黄色のシュシュを早速身につけて一回りした。
「他にも、ヘアーアクセを何点か買ったんだー。」
「ほ、蛍は何を・・・。」
「私ですか！私は可愛い麦わら帽子があったので衝動買いしちゃいました。」
「・・・・・。」夏海は、手に持っているぬいぐるみや玩具を手にしている事が無性に恥ずかしくなり後ろで隠した・・・。
　楓がにやにやと笑っている。
「お兄ちゃんと、ボクくんまだかな？」
「ああ、確かＰＣショップだったな・・・、いってみるか。」一行はなかなか来ない二人に痺れを切らし、ＰＣショップに向かって歩き出す。
　その時、カラーン、カラーン♪とベルを鳴らして景気のいい言葉が

響いた。
「おめでとうございまーす。
特賞、沖縄旅行3泊4日の旅ご当選でーす。」
「いいなあー、沖縄の旅だって！
さっき買った時に福引券もらったような・・・。」小鞠が一枚もらっていたのを思い出した。
「先輩、私も一枚貰いました、いってみませんか？」
「そうだね、行ってみよう。」二人は福引所に足を運ぶと、特賞を引き当てたボク君が頭をかきながら目録を受け取っていた。
「えっ！ボクくんが沖縄の旅引き当てたの！」
「う、うん・・・。卓にいちゃんのパソコンのパーツ買ったら何枚か貰って、お礼にもらったんだけど・・・。当たっちゃった。」
「す、凄い！」
「・・・それと、これも当たっちゃった・・・。」
横には二等と書いた品、５５インチの有機液晶パネルを当てていたのだった・・・。
カラーン、カラーン♪
「お嬢ちゃん、おめでとうございますー。
３等高級黒毛和牛セット大当たりでーす。」
「ふっ、ふっ、ふっー。ボク君ばかりにいいかっこはさせないんなー。」
後ろを見るとれんげちゃんも当てており、仁王立ちであった。